

山形短期大学民話研究センター資料叢書

飯豊山麓

中津川昔話集 (下)

編 武 田 正

山形短期大学民話研究センター資料叢書

飯豊山麓

中津川昔話集
(下)

編 武 田 正

中津川昔話集

(下)

69 68 67 66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54

姥皮 姥皮 姥皮
 なら梨とり
 地蔵浄土 地蔵浄土 地蔵浄土
 地蔵浄土 地蔵浄土
 ねずみの金干し
 金の化けもの
 豆じじいと草じじい
 くいごこむかし
 こぶとり
 猿地藏
 見るなの座敷
 笠地藏

76 74 72 70 62 56 54 52 49 43 39 35 31 24 14 5

85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70

笠地藏 脂とり 角屋の三平
 けちんぼの話
 和尚と小僧・小僧殺し
 和尚と小僧・フクデ餅
 団扇太鼓
 篩借り 篩借り
 尻鳴り扇
 山鳥むかし 山鳥むかし
 山鳥むかし
 南の山の馬鹿智・手水を廻せ
 南の山の馬鹿智・茄子漬
 南の山の馬鹿智・糸合図
 南の山の馬鹿智・馬の尻に札

113 112 110 109 107 105 103 101 98 96 93 89 88 86 83 81

昔話の話者（敬称略）

小坂 男鹿てつの

男鹿 秀

数馬 鈴木ひろ

高橋うめの

須郷 大石きみよ

山口すえの

菅沼 井上元一

下屋地 佃 すす

山口ふみ

岩倉 後藤とよ

山形県西置賜郡飯豊町中津川地区

小坂・数馬・須郷・菅沼・下屋地・岩倉

54 姥 皮

むかしあつたけど。

ここのようなどこにじじとばばいたけど。じさま山さ火野うないに行つたけど。
そして、あんまりこわくて、

「この火野うなつて呉^ける人あつたら、娘三人持つてだから、どれでもええな呉^けれる」
て、一人口たつたど。そうすつど、どっからか猿あ聞きつけて、ホイホイて来
て、

「じじ、じじ、今なに語つた」

「あんまり火野うない、こわくて、この火野うなつてくれる人あつたら、娘三人
持つてだ、どれでもええなくれるて言うた」

「ほんじゃ、おれうなつてくれつから、娘呉^ろ」

て言う。そうしてはあ、本氣になつて、ホイホイてうなつてはあ、ちゃんと終^{おや}し
て呉^ろつじやので、じじは家さ帰つて来て、

「困ったもんだ、娘三人持つてだな、どれでもええから呉れるなて言うて、ほんに猿来らっじやら困ったもんだ」

と思つてはあ、朝げに寝つだんだど。そしたら娘あ、一番娘あ来て、

「じんつあ、じんつあ、起きて御飯あがれ」

「御飯食たくないげんども、にさ、おれ言うこと聞いて呉ろ」

と言うど、

「何でもええな語れ」

「猿のおかたに行つて呉んねが」

と言うど、

「何語つてゐる、この腐れじんじ」

と言うど、枕ぶつつけて逃げて行つたど。そうすつど、困ったもんだどて居つど、二番目あ、

「じんつあ、じんつあ、起きて御飯あがれ」

て来たんだ。

「御飯食うあええげんども、おれあ言うこと聞いて呉^くろ」

て言うど、

「何でもええから語れ」

て言う。

「猿のおかたに行つて呉^くろ」

て言うど、

「猿のおかたなの、蛙^{びつき}のおかたなの、馬鹿語つて、もんぼれじじい」

て言うど、またふんだくて逃げて行つたど。こんどはただ一人、三番娘、じじ

は何とも仕様ないど思つて寝だれば、

「じんつあ、じんつあ、御飯あがれ」

て、一番小つちやい娘来た。

「御飯食うええげんども、にさ、おれ言うこと聞いて呉^くろ」

「何でもええ、聞くから、語りなされ」

て言うけあ、

「猿のおかたに行つて呉んねが」

て言うど、

「ええにも、ええにも、蛙のおかたでも猿のおかたでも何でもええから、起きて御飯あがれ」

て言うけど。ええ娘で。ああ、ええごんだて起きて御飯食つていたれば、猿あホイホイつて来たけあ、

「じじ、じじ、おれに呉れる娘あどれだ」
て言うけざあ、

「この一番小つちやいの、これだ」
て言うたけあ、喜んで猿あ、そんどき行くどき、唯行つたべあ。三つ目に來つどき餅搗いて、

「重箱さつめて行くべ」
て言うたとき、

「重箱くさいて言うがらに、食ね」

て言うど、こんど、

「朴の葉さ包んで」

て猿言うど、

「朴の葉くさいって、じんつあ食いゃんね」

「んじゃ、臼さ入っで、臼がらみ背負って行くべ」

て、臼がらみ背負ったどこなんだけなあ。そして臼がらみ背負って来て、ずっと山来っど、桜の花きれいに咲いっだな、

「おらえのじんつあ、花好きだから、この桜の花好きだ、おしよって呉ろ」
て言うど、

「ほんじゃ、降ろすべ」

て、猿あ臼降ろしにかかっど、

「土さ降ろすど土くさいて食いゃんねから…」

て言うた。

「そんじゃ、背負って…」

猿あ餅臼さ入つて背負つて、木さのぼつて、「これええか」て言うど、「それより、いまちいと上んな」「これか」て言うど、「いまちいと上」て言う。よくよく忪ぼえのええなさ手掛けつど、ポキツと押折おしよつて、下さ落ちだどな。そうすつど猿あ、

猿沢に捨つるこの身はいとわねど、

後に残りし 姫ぞ恋しい

て唄詠よんで流つて行つたど。そしてはあ、

「これから家さもどつて行つたて、姉どもに猿のおかたなんて馬鹿にされつからはあ、それよりはいつそう下の長者、上の長者で、長者あつから、そこさ行つて釜の火焚きでもしんべと思つて、家さ来ねで別の方さ行くどこだど。ずっと途中行くととき、鬼どもいて人として食う、暗くなつどこだでほに、ずっと行つて暗くなつて来た。火箱のくらの家ある。そこさ「もしもし」て立ち寄つたれば、「今夜一晚泊めて呉ろ」て言うたれば、年寄りばさまいて、

「おら家は、次郎太郎という鬼あいて、人として食うなだから、あの、泊めらん

ねげんども、納屋ん中さでも入ってかくつで待つてやれ」

て言わつて、そして入つて泊つたど。そしたば次郎太郎あもどつて来て、「人くさい、人くさい」なて言うげんど、「人をかくしつた、んねが」て言うど、ばばあ、「さつきだ小鳥とつて焙つて食つたから、その匂いだべ」て言うたば、次郎太郎あまた出はつて行つたどこだな、朝げ。そしてずっと、「人は、人は」なて行つたから、「姥皮ていう皮呉れつから、これかぶつて行くじど、行つて次郎太郎に行き会つたらば、豆三粒まいて、寝てろ」て言う。「そうすつど死んだと思つて行んから……」て言うて、姥皮ていう皮もらつて、かぶつてずっと行つたど。ずっと行くと、次郎太郎、「人は人は……」て来て、そうすつど、娘あ死んだ真似しつたんだから、「昨日食つた皮だ、おととい食つた皮だ」と言うど、足で蹴つとばして行つたどこよ。それからずつと行つて、下の長者、上の長者と二軒ある、その長者さ行つて、

「釜の火焚きにでも使つて呉ろ」

て行つたところが、

「ほんじやら、見かけの悪い婆あだげんど、火焚きくらいさせんべ」

して、寄せて使ってもらったど。そうすつど、夜になつど、昼間はひどいばばの格好してつけんど、夜になつじど、ちゃんと化粧して、髪結つて勉強してつじほどに、こんどはその家の長者に、一人息子あいて、そいつあ小便たれに起きて、なんだか、あの火焚きばんば、毎晩灯し点けてるもんだ、なにしてるもんだと思つて、そつと覗つてみたらば、ちゃんとしてええ女、勉強したな、それ見ではあ、息子は病氣になつてはあ、何も飲みも食いもしないではあ、恋の病いになつたど。そして医者たのんでも、なじよにしてもええ氣はなくて、占いさ行つて占つてもらつたどこよ。したれば、「家内のうちに一緒になつだい人居で、そのために病^やんでんだから、番頭でも女中から、いた人をみな、水汲んで、枕元さ行つてみる」て。それからみな行つて、

「若旦那さま、若旦那さま、水あがれ」

て、一番みかけのええ女中から先に行つたところが、

「水飲みたくない」

て、さっぱり見向きもしないど。そして段々に誰あ行つても「水飲まない」て

飲まないんだし、困ったもんだて。

「いま一人、台所に、釜の火焚きばんばいた筈だ。あんなばばの水など飲むまいげんど、ばばだって仕方ないから」

て言うもんで、水汲んで行つてみて呉^くろて言うたべも、そうすつど、

「おれなど行つたて、若旦那さま飲むもんでないから、嫌^やんだ」

て言うたげんども、

「そんなこと言わねで行つてこい」

て言わつて、水汲んで行つて、「若旦那さま、水あがれ」て汲んで行つたば、

「なんぼかうまかんべ」て、ちゃんと起きて水飲んだど。それから評判になつて、みんな、

「あんなもんさ、嫁にとるなんて」

世間から笑わつて、んだげんど仕方ないんだから、御祝儀ということになつて、みんな大勢人招んで、そんな時、ばば、やつぱり花嫁になつたて、その姥皮脱がねんだから、かぶつて坐つたど。そうすつど、花婿はちゃんと立つて小便たれに

行くふりして出はって来て、そしてそのうしろから、姥皮ぐいっと剥ぎ取ったど。
そうすつど、ええな「卵に目鼻」のようなきれいな娘はあ、そんでその娘と一生
富貴に暮しましたけど。むかしとーびったり、釜の蓋さんすけ。

（山口すえの）

55 姥 皮

むかしあるどこに、おじいさんとおばあさんがいて、三人の娘持つて、後千刈^{うしろ}
前千刈の田もつていたのよ。そしてその時は旱魃で水あ一つも掛かんねでよ。朝
にじさまがそこさ行つて、

「米は取れない、この分では、このうしろ千刈、前千刈さ、水だんぶり掛けた人
あれば、娘三人持った、どれでも一人嫁に呉れるげんども…」
て、一人言たったのよ。そうすつど、

「何なに、じじい、今なに言った」

て、こう出てきた人いる。

「うん、何も言わね」

「いや、言った言った。何か言ったから、言うてみる」

「実はこれこれで、水あみな干って困った。この水掛けで呉っじや者に娘一人呉れる。誰か掛けて呉れる人あんだか、と、こう言うた」

「そんなこと雑作ないべちや、おれ掛けて呉れる。一晚、今晚一晚のうちに掛けてみせつから、娘一人呉ろ」

「掛けて呉れっこんだら、呉れるどこでない」

て、次の朝行ってみたらば、だっぷり後千刈、前千刈さ水ざんぶり掛かってい
たど。そしてそんな時、

「おれはこういう、里さ来つどきは人間の姿して来るげんども、この山奥の沼の
主で、大蛇の化身だ」

さあ、じじは困った。蛇のおかたに行つて呉ろなて言うたて、娘は「オイ」て

言わね。困ったごんだと思つて、まず朝に起きる元氣もなくていた時、一番大きい姉が、

「じじちや、じじちや、御飯が出たから、御飯あがれ」

「いやいや、おれは心配なことあつて、飯まんまどこでない、おれあ言うこと聞いて呉んねえか」

「なじよなごんだか言うてみやれ」

「これこれ、こうしたこと、水掛けてもらつてはあ、それが人間だらええがんばりども、この入りの山奥の沼に住んでる蛇のおかただ、蛇のおかたになつて呉れられんめえなあ、にしやは…」

「この馬鹿じじ、人もあるべに、蛇のおかたになつていられめちやえ、腐くつされ馬鹿じじやあるもんでない」

て、枕蹴つとばして行つたど。

「さて、困ったこと相談したもんだ。そうでなければ、おれは蛇に吞まつてしまふことだ。さて困ったことだ」

と思つていたら、こんどは二番娘が来て、

「じさま、じさま、御飯ができた。起きて上がれ」

「おれあ言うこと聞いて呉ろ、そうすつど飯も食かれつけんども…」

「何のごんだか言うてみる」

「実は、これこれで、蛇のおかたになつて行つて呉ろ」

「そんな馬鹿じじいざあつたもんでない。蛇のおかたになつて呉けろざあ、あるもんでない」

これもまだ枕蹴つとばして行がった。

「残つたけ、小っちゃい妹だ。姉どもざあ行かねもの、妹あ行くはずはない。これはおれあ殺される他はない。吞まれる他はない」

その覚悟していた時、三番目の娘あ来て、

「じつちや、じつちや、起きて御飯あがれ」

「心配ごとあつて御飯どこでない。姉あねちやだには蹴つとばさつて話聞いてもらわんねがつた。お前は聞いて呉んねえか、実はこれこれで、水掛けてもらった。ま

ず駄賃に娘一人呉れる約束した。姉どもには行かねて言わつじや。お前は何とか行つて呉んねえか」

て、こう言うど、三番目の娘あ、

「いやいや、ええどこでない。じつちや、ええどこでないから、起きて御飯あがれ」

「ほんじゃ、ええことだ。起きて御飯たべて…」

て、おじいさんが起きて御飯食べて、

「ほんで、じいちゃん、おれは何にも、花嫁装束はいらねから、針千包、フクベシ千買つて呉ろ」

それは簡単なことだ。ほでにさつそく町に行つてフクベン千と針千包み買つてそれを持つて待ち構えていたどこさ、ええ男に化けて来たどこよ、そして、

「約束通り娘もらいに来た。早速娘も準備して待ちてだどこだから、連れでつて呉ろ」

て、姉どもは戸の隙から覗つてみて、

「なんだ、おらえのじじ、嘘語って、あんなええ男だら、おらだも嫁に行きたかった。嘘を語って、あんなええ男、蛇だなんて、とんでもない嘘語って…」

姉どもも、けなれぐなつて、節穴から覗つていたけど。そして娘はもらわつて針とフクベンを背負つて、野くれ山くれ、段々山行つて、見たらその人は、

「おまえも、よくじいさんに聞いてきたべげんど、おれは里さ行くには、こういう姿で行くんだけんど、実はこの沼の主で蛇で、これからその姿になつて行んから、その後から来い」

て、大きい大蛇になつて、ノロノロ、ノロノロと、蔑よしでも何でも踏みじつてこういうに道を作つて、その後からその娘は、嫁に行つたんだど。そして沼の傍さ行つて、

「さあ、ここがおれの家だから、お前も入はいんねねから、おれから先に飛びこむから、お前も入れ」

「ほだげんども、約束がある。お前がこのおれの背負つてだ針を浮かして、このフクベンをこの沼さ沈めれば、おれも入つから、こういう風にしてもらいたい」

「そんなことはたやすいごんだ。そうすれば、お前もこの沼さ入れ」

て言うようなことで、フクベンを沈めるような気になつど、ポコンと浮きる。

針をこう浮かす気になつど、沈む。そうしてるうちに鉄というものは、一番蛇さ毒なもんだから、蛇さみな刺さつて、グダグダ、グダグダとなつて、死んでしまつたど。そしてこんどは逃げた逃げた。それは後も見ないで逃げて行つたどこよ。そして途中で道間違つて、どき行つたらええんだかと思つていたとこに、年寄りなじさまに会つて、その姥皮、「これ持つて行け」て、

「お前はこれが重宝になることもあるから、お前の親孝行に免じて、これ呉れるから、これ持つて行け」

て、そして姥皮もらつて、ばばの姿にそこらなつて行つたど。そしてある長者の火焚きばばに入つたど。そして火焚きして家さも帰んねで、マメマメしく、ばばの姿こそしてつけんど、年は若いから、まず、マメに真面目に働くもんだから、みんなに、

「こんど来たばばはええばばなもんだ。本当に働きぶりはええもんだ」

みんなに気に入られた。そうしているうちに娘は夜だけでも自分の姿になって勉強でもしたいと思つて、その姥皮脱げば、きれいな美人だったど。世にも稀な美人だったど。きれいな髪を結つて、お化粧して、ちゃんと坐つて勉強してたもんだど。そうしているうちに、その息子が見染めてしまったわけよ。そうして毎晩げ便所さ立つてみて、

「なんだて、この間頼んだ飯焚きばんばは毎晩灯あかしをつけて、何をしているもんだかな」

て思つて戸の隙から見たら、そのきれいにして、姥皮を脱いだから、まず、いままでその町になど、見たこともないような女になつて、びっくりぎようてんして、それから恋の病いになつてしまったな。そして薬飲ませても治らず、御飯は三度の食が二度になり、二度の食事が一度となり、とうとう重い病氣にかかつてしまつてな、その息子がどうしたらええんだかて居たとき、占いの者がビガンピガンと鉦コ叩いて来て、

「おらえの息子が、これこれで医者にかかつても薬飲んでも治んね病氣なもんだ、

何の病氣だか占つて呉ろ」

て言う風に占い師に頼んでもらつて、ところが、

「その息子は恋の病で、この思いの女を嫁にせえば、必ず治る病氣だ。その嫁もこの家の中にいる、この家の中にいるものを嫁にとつてやれば、必ず全快は間違いなしだ。」こういうように占いが出たもんだから、大變だ。その女中も十人や二十人はいるもんで、いやそういうこと触れたもんだから、われこそはこの家の長者の嫁になりたいと思つて、一生懸命になつて、お化粧して今までしまつておいた振袖の着物を着たり、ありだけのお召換えをして、ゾロゾロ出てきたわけだ。んでもその姥皮かぶつていたばばは、こうしていたわけだな。

「誰なものやら」

て思つて、そこに来るのは、この家には梅の木があるんだ。梅の木さ鶯がきて止まるから、その梅の木さ上がつて、梅の枝をポキッと押折おしよつて、そうして鶯が逃げないで、その梅の木を若旦那の枕元さもつてきた人を嫁にすれば、必ず全快すると言うけど。その鶯はその娘が可愛がつていた鶯であつたど。蛇の嫁に来る

とき放した鶯であつたけど。そしているうちに一番先に美人の方から、段々に上がつて行つて、われこそはこの家の嫁になろうと思つて、梯子上がつて、梅さ鶯の止まっていたの押折る氣になつて、ブーンと飛んで行く。その次、その次とみんな行くげんど、全部飛んで行つて一人として、嫁になる女いがつた。残る女というのは、ばば、火焚きばば、ばりだ。

「お前も女の一人だもの、お前もしてみたらええでないか」
て、馬鹿にしたい、みんなに言わつたそう。

「いやいや、おれなど駄目だから、みなさんのようなきれいなお方でさえも、折るかねたもの、おれのようなものが上がったて、どうせそれは駄目なことだ。無駄なときは、かかんない」

て、聞かねがつたそうだけれども、みんなおかしいもんだから、小馬鹿にしてどうしてもお前上がつてとつてみるて言うもんだから、

「おれも一つ登つて、折つても駄目だと思ふげんとも、かかつてみて」
て、自分の部屋に入つて、ちゃんと姥皮脱いで、きれいにお召換えしてみつて、

まずまずその女中なんとも違つて品のええ娘になったことよ。そして行つてその梅の木さ登つて鶯が止つていたな、ポキッと押折つたげんど、一時はブーンと飛ばつたげんど、またその鶯が梅の木さ止つて、その枝を持つて若旦那の枕元さもつて行つたつて。

「いやいや、それではこの人がおらどこの嫁にする他ない」
て言うようなことで、まず長者の嫁になつて、一生娘は安樂に暮したもんだ。
親孝行の報いだと。とーびつたり釜のふた、さんすけ。

(山口ふみ)

56 姥 皮

むかしあつたけど。

うしろ千刈、前千刈持ったおじいさんがいたつけど。そしてその年あ旱魃でみ

な田は干^ひつてしまつて、

「こんではとつてもはあ、水掛けねど、穫れそうもない、困ったもんだな」

て、田の端^{はた}で、

「おれ、娘三人持つてたげんど、こいつさ水掛けて呉れる人あつこんだら、娘三人持つた、どれでも一人呉れっけんどもなあ」

て、一人口たつたれば、山の方から、ガサガサ、ガサガサと猿降^おつて来て、

「おじいさん、おじいさん、今何言うた」

「おれ、あの、田さ皆水干^ひつて穫^ひんねがら、水かけて呉れる人あつたら、娘三人持つたから、一人呉れるて言うた」

「ほんじゃ、おれ掛けて呉れんべ」

て、その夜大雨降つて、ざんぶりと田さ水かけてもらった。そしてこんど、おじいさんは、

「もしか娘が行かねて言えば、なじよしたらよかんべ」

とて、心配して寝つたれば、一番娘きて、

「おじいさん、おじいさん、朝飯、御飯だから、あがれ」

て言うたれば、

「おれ、こういうごんで田干^ひつたもんだから、水かけして呉^くつたら、娘三人持ったから、呉^くつでやるて言うたから、行^いつて呉^くんねが」

て言うたれば、一番大きい娘、

「何もんぼれ語^{かた}っているんだべ」

て、枕蹴^{まくらう}つとばして行^いつてしまつたど。二番娘、また来て、起^おして、

「御飯あがれ」

て来たもんだから、また同じこと言うたれば、その二番目の娘も、

「なにもんぼっでいるもんだか」

て言うて、行^いつてしまつて、

「困^こつたごんなんだな」

ていたらば、三番目来て、

「おじいさん、おじいさん、御飯あがれ」

て言うたば、

「おれ、猿と約束したげんども、嫁^いつて呉^くれられんまいか」
て言うたば、

「あまりええ、行^まんから起^おきて御飯^まあがれ」

て言うので、起^まきて飯食^まつて、こんど御祝儀の日、そしたば、猿は紋付きなど着て来た^まごんだけな。みんなに送^まらつて猿の家さ行く途中に、大したきれいな岩くれさ、藤の花咲^まいっだ。

「あれ、欲しいな」

て言うたれば、猿あ、

「よしよし、おれあ採^まつて来^くて呉^くる」

なて、「これか」て言うたれば、「いまと上^うんな」「これか」て言うのと、「いまちいと上^うんなええな」て言うて、よくよく忖^そぼえまで行^まつて、「これか」て言うているうちに、下^ささ、まぐつて死^しんでしまつたど。そして娘は戻るわけもいかなないんだし、ずうつとずうつと行^まつたれば、原^はっぱに家あつから、そさ行^まつて、

「泊めておくやい」

と言うたれば、

「ここ、鬼の家だしなあ」

て、おばさが出はって来て、

「んだげんど、おれ、なじよかして隠して置くから…」

て、そこさ上げて待つて夜飯早く御馳走になつて、

「ほんじや、押入れさ隠しておくから、鬼来たたて、決して音立てんなよ」

て言わつて、押入れさしまつてもらつているうちに、鬼あ来て、

「何だ、ばば、ばば、何だか人くさいな」

「人なんてあんまえちやえ、人くさいなんてあんまえちやえ」

「いや、人くさい」

なて、

「今日は里雀来たもんだから、それ、おれあとして焙つて食つた匂いだべ」

て、^{だま}騙かして、そして次の日、鬼あ早く出はって行つたど。ばばは娘出して、

「これ姥皮ていうもの呉れっから、この鬼に追かけられたときあ、これ、豆三つポロッと撒くじど、『ばばあが』て行んから」

姥皮て言うものもらって、それをかぶってずうっと来たれば、やっぱり鬼あ追かけて来たけど。そして豆三つ、ぼろっと置いたば、

「おお、ばばか」

どかて、鬼あ行つたど。それからずうっと行つて、町さ出はったもんだから、大きな屋敷みたいなどこさ、

「使つておくやい」

て、その姥皮かぶつてだな、そのの家さ使ってもらつて一生懸命で稼いで、夜になつじど、その姥皮脱いで、自分の部屋さ入って、一生懸命勉強したどこ、そこの家の若旦那見つけて、そして嫁に欲しくなったごんだけな。そうして嫁に欲しいなて言うたて、脇の衆に反対さつて、病氣になったごんだど。そして医者に、なんぼ見てももらつても、どこも悪くないもんだから、医者あ、

「欲しい人でもいたんねが」

て言わつて、そして、こんど息子に聞いてれば、その姥皮かぶつたの、それ欲
しいて。んだら、その姥皮かぶつたの、それ欲しいて。んだら、あの年寄り…な
て、みんなに反対さつじやげんども、「是非とも欲しい」て言うもんだから、いよ
いよ御祝儀の時、ちゃんと姥皮かぶつて坐つて、して、みんな招んでしつたも
んだ。

「年取つた、年寄りだ」

とかて、みんな言うてた風だけど。そしたれば、その若旦那ちよつと立つて、
その姥皮取つたもんだだけど。いや、そしたれば中からきれいな娘出はつて魂消た
どこだけど。んだから親孝行さあするもんだだけど。一生安泰に暮したけど。とー
びんさんすけ釜のふた。

(大石きみよ)

57 なら梨とり

むかしあつたけど。

「行け山^いといふとこさ、梨の木あつて、梨なつてゐる。そこさ行つて梨摘んでもらつて、そして食いたい」

て、おつかさだごでな。

「ほんじゃ、おれ摘んでくる」

て、太郎が出かけて行つたそうだ。そして段々行つたらば、和尚さまに行き会つたじだな。そしてたら、

「どこさ行く」

「行け山さ梨もぎに行く」

「これから行くじど滝あるから、そさ行つて行けざんざんて言うたら行けばええし、行くなざんざんて言うときは行くな」

て言わつた。そして段々登つて行つたら、やっぱり大きな梨の木あつたそうだ。

その梨の木さ行つて捩いで、袋さいっぱい捩いで帰つて来んべと思つたら、暗くなつてしまつたど。そしてはあ、帰ることも出ないんだし、梨の木の下の寝て休んでいたら、山から何か降ちてきて、そして太郎を丸飲みしてしまつた。ストンと。そうすつどまた家では案じて、

「兄さんが帰つて来ない、ほんじゃ次郎、迎えに行く」

て、次郎はこんど登つて行つたそうだ。そして、次郎もまた和尚さまに行き会つた。

「こつから行くじど、滝があるから、そさ行つて、こうして耳当てて聞いと行けざんざんて言うたら行けばええし、戻れざんざんて言うたら戻つたほうかええ」

て言わつじやげんども、

「なえだて、ここまで来たもの、梨食^くたいていうもの、行つてみんべ」

て、戻れて言われたげんども、行つたど。そして行つてみたら、これも暗くなつてはあ、梨の木の下で野宿。そうしたらまた山から何か降ちてきて、

デツクバツカ スツカツカ

バンゲノチャノコ メツケダ

て、さえずりさえずり山から落ちてきて、そしてまた自分の傍さ来てはあ、自分をストンと吞でしまった。そしてはあ、吞まつじや。こんど三郎は、

「なえだて、兄さんたち来ないから、何かあんべし」

こんど次の日、朝に早く出かけて行つたれば、また和尚さまに行き会つた。

「おまえは、どこさござる」

「行け山さ、かあちゃんが梨食^くたいて言うから、梨もぎに行くどこだ」

「ほんじや、これから行くと滝あつから、行けさんさん、行けさんさんて言うたら行けばええし、そして戻れさんさん、戻れさんさんて言うたら戻つた方がええ」

て教えらつじや。そうしたれば、『行けさんさん、行けさんさん』て、滝言うた。そうすつど、三郎はこんどまた和尚さまに行き会つた。

「お前、どこさござる」

「行け山さ、梨もぎに行くどこだ」

「これから行くじど、大きな石があるから、その石を押してみて、まぐつで落ちたら行けばええ。動かなかつたら、行かんねぞ」

て教えらつた。そして行つてみたら、やっぱり大きな石あつたそうだ。そいつ押してみたら、その石あコロコロと転んで行つた。下さ。ほんじやと思つてまた登つて、そして行つてみたら、やっぱり梨あたと実つていたど。そいつをもいで、そして袋さ入つて、そうしているうちにはあ、また日あ暮れて、夜明しているど、また山から化物あ降つてきて、やっぱり、

デツツクバツカ スツカツカ

バンゲノチャノコ メツケダ

て語つて降つてきた。そして化物来つど、こんどは化物と、三郎じや荒^{あら}くて、相撲とりして、そして化物負けたど。下になつて。

「生命ばかり助けて呉ろ、おれ、これから悪いことしないから、生命ばかり助けて呉^くろ」
て。

「そんじやら、今まで呑んだ兄さんたちを、ここさ吐き出せ」

て言うたら、まだ溶けながったがして、二人の兄さんたちを吐いて出してしまつたつて。そして三人でいろいろ御飯など持つて行つたのを食べたりして、そして達者になつて、家さ三人で戻つて来たけど。あらゐ者じだか、賢こゐ者じだかは、かなわねど。とーびつたり。

(男鹿てつの)

58 地蔵浄土

まいど、じじとばばいだつけど。そしてばばが朝げに起きて、座敷掃つかと思つたば、団子一つあつたど。そして、

「じじ、じじ、たいした大きい団子あるもんだな」

て言うたらば、じじあ起きてきて、

「おお、なんだこの団子、たいした大きい団子なもんだ」

なて、抑えつかと思つたら、団子コロコロ、コロコロと転がつて行つて、「団子殿、団子殿、どこまでござる」て追かけて行つたらば、大きな孔さチョロつと入つて行つたど。そしてじじあ、そこからずつと追つけて行つたば、広い原っぱさ出はつて、そしたば団子の姿見えなくなつて、ずつと行つたらば、大きな地藏さま立つていたど。そして、

「地藏さま、地藏さま、団子転んで来ながつたべか」

「さあ、団子転んできたげんど、おれあ御馳走になつてしまつた」
て。

「その代り、こさ鬼こどもあ来て、一生懸命で博奕を打つたり、花札をしたりして、宝物いっぱい出して遊ぶから、そのとき鶏の真似しつじど、逃げて行んから、おれ肩から登つて行つて、そさ隠つで、鶏の真似しろ」

て言わつで、そのじじ、地藏さまのうしろさ登つて、そして、いや来たにも来たにも、鬼こはいっぱい来て、その地藏さまの前で宝物いっぱい出して、花札打つ

たり博奕打ったりして、ほら、こん時だ、て、

パタパタパタ、コカカエロー

「さあ、一番鶏だ、鳴いたぞ」

いや遊ぶにも、遊ぶにも。そしてまたこんど、

パタパタパタ、コカカエロー

「ほら、二番鶏だぞはあ、いまちいとだぞはあ」

なて、いやいっぱい宝物置いっだとき、

パタパタパタパタ、コカカエロー

て言うたば、「さあ夜明ける」て、その宝物置いではあ、わらわら逃げて行つた
ごんだど。そしておじいさんはいっぱい宝物もらつて家さ來たらば、隣のばば、
「ほう、したり。こつちの家では宝物たいしたもんだ。なじよして、どさもらつ
て來た」

て言うもんだから、こういうことで団子さ追かけて行つたれば、地藏さまで、
こういうごんでもらつて來たて言うたば、

「ほう、おらえのじじも、灰まらばりはじつていつから、やってみらんね」

というもんで、団子を大きく握って、小汚たない団子、まくってやって、そして地蔵さまさ行ったげんど、さっぱり食ね^かんだけずげんど、びりびり地蔵さまさ食せて、そして、うしろさ登れとも言わんねの登って待ちっただけど。そしたればやっぱりそのうち鬼こあ来て、一生懸命遊んでいるもんだから、真似して、「パタパタ、パタパタ、コケコエロー」て言うたれば、

「一番鶏鳴いたぞ」

また「パタパタ、パタパタ、コケコエロー」て言うたんだけな。そしたら、

「ほら、二番鶏鳴いたぞ、いま少しだぞ」

なっているうちに、「パタパタ、パタパタ、コケコエロー、アハハ…」

て笑ったど。

「いや、これは鶏でない、誰かに相違ない」

て言うたれば、じじなもんだから、いや攻めらつて、散々な目に合つてはあ、宝さっぱりもらわねで来たけど。んだから、人の真似さあするもんでないけど。

とーびんさんすけ釜の蓋。

(大石きみよ)

59 地藏浄土

むかしあつたけど。

おばあさんとおじいさんがいて、おばあさんが朝げに座敷掃除すつどき、団子まぐつできたけど。そいつ掃いて転ばしてやったら、どこまでも転んで行つて、拾うべと思つたら、拾わんね。おじいさん起して、まずおじいさんが追掛けたごで。そうすつど、おじいさんが、

「団子どの、団子どの、どこまでござる」

て追かけたげんども、止まんねがったど。そしてよつぽど山奥さ行つてみたら地藏さま立つてたど。その地藏さま拾つて食つたごんだど。そしておじいさんが、

「地藏さま、地藏さま、団子来ながったかな」

そしたら地藏さま、

「来てあつたげんども、おれ拾つて食つたから、その代り、おれお金もうけさせつから、おれの膝の上さあがれ」

「とても地藏さまのお膝の上さなの上がらんね」

そしたら、膝までやつと上がったら、

「肩の上さ、あがれ」

「肩さなどとても上がらんね、もつたいない、膝までさえやつと上がったから上がらんね」

て言うたら、こんどは、

「頭の上さあがれ」

て言うた。

「とても地藏さまの頭の上さなど、足掛けらんね」
て言うたげんども、

「ええから上がれ、上がれ」

て言わつで、まず上がった。地蔵さまの大きな扇、そいつを授けて、じさ
ま、

「晚げ、鬼、メクリに来るから、そうすつどお金いっぱい出してやってしてつ
から、そんな時、鶏の真似しろ」

て言わつで、そして頭の上さあがつていたら、鬼共あ来て、メクリ始まつたど。
そしていっぱいお金ひろげた頃、その扇でパタパタと羽ばたきの音して、コケコー
て音立てたど。鬼共あ一番鶏。三番鶏になつじど帰つて行^いんから、まだ夜中だけ
んども、鶏、刻を作つたと思つて帰つて行つたど。そしてはあおちて来て、

「お金、みな呉つから、さろつて行け」

て言わつで、おじいさんがさろつて行つたど。そうすつどこんど、お金いっぱ
いもらつていろいろなもの買つていたどこさ、隣のおばあさんが火もらいに来た。
そしたらおばあさんが、

「どうして、こがえにお金もうけた」

「おらどこのおじいさんが団子転んだな、追かけて行ったら、地藏さま立ってあつたどこで地藏さま拾って食ったから、そのお札に、その頭さあがつて鶏の真似しつど、お金いっぱいもらって来た」

て言ったら、こんど隣のおばあさんもけなれなくなった。ほんじゃ、おれも…、団子拵って、ほんじゃ転ばして、おじいさんが追かけて行つたど。また団子ころころ転げて行つて、そして地藏さまの前さ行つて、止つたもんだから、地藏さま拾って食つたわけだ。そうすつど、

「団子転んで来ながつたべか」

「転んで来たげんど、拾って食つた」

そしたら、

「晚げ、鬼衆はメクリに来つから、鶏の真似しつど、お金おいて逃げて行んから、そんどき、そのお金呉つてやつから、団子の代りに…」

て言わつて、地藏さまに、あがれとも言わんねども、トントンと地藏さまの頭さあがつて、そして扇を借つて、鶏の真似したそうだ。そして鬼共もまた来てメ

クリ始めつど、鶏の真似したそうだ。そうすつど、鬼共、もはや帰る頃になったげんど、少し早いがったから、嘘見つけらってしまったけど。とーびったり。

(男鹿てつの)

60 地藏浄土

むかしあつけど。ここのようなどこに、正直じじいと慾ふかじじいたど。朝げに、ばば早く起きて、座敷掃いたれば、団子一粒転んで来たな、それ、

「団子どの、団子どの、どこまでござる」

て、ずつと追かけて行つたれば、猫ぐり穴から転んで行つた。コロコロと転んで行つたな、

「どこまでござる」

て言うど、

「御山の堂までまいる」
みやま

て行つてしまつたど。そしてずっと追かけて行つたれば、広い野原さ出はつて野原に地藏さま立つてござつたど。

「地藏さま、地藏さま、団子転んで来なかつたべか」

「転んで来たつけあ、おれ、拾つて焙つて食つたどこだ。晚げ、博奕うちに赤鬼黒鬼みな集まつて博奕打ちすつから、二階さ上がつて隠つで、鶏の真似しろ。そうすつど逃げて行んから、そしてもどつて行くとき、金集めて持つて行げ」

て言わつで、ばば、そこさ寄つて、地藏さまの肩さ上がれ、頭さ上がれて、ずつと上がつて行つたところあ、二階さ上がつて、藁中さくぐつていたれば、夜中十二時頃になつど、赤鬼、黒鬼あ来て、そしてはあ、

「何だか、人くさいようだな」

て、

「雀とつて食つた、その匂いだべ」
て、地藏さま。

「時間が来たから、始めんべ」て、

デッチ十六、カマカイ棒

丁だ半だ

て、一生懸命になって打っているうちにはあ、大抵よかんべて地藏さま言うから、ばさま、「パタパタ、コケコー」て言うど、

「ああ、一番鶏もよあ鳴くがあ」

よつぽと経もよつてから、また「パタパタ、コケコー」て言うど、

「さあ、二番鶏鳴いたから、大抵夜明けから、行くべ」

て言うもんで、赤鬼黒鬼、金ひろげっ放しで行ってしまったはあ、逃げて行ってしまったどこだど。そうすつど、

「降っで来い」

て、地藏さまに言わつで、ばさま降っできて、

「では、この金みな持つて行げ」

て言わっで、さらって行っただこだけど。そして家さ行つて、じじ、金干ししていたどき、隣のばば、

「火呉っでけろ」

て来たけど。朝げに。そしてあちこち見っだけあ、

「この金、どっからこがえにもうけやった」

て言うど、

「昨日の朝げ、早く起きて座敷掃きたら、団子あ転んできたから、その団子を追かけてずつと行ったらば、地藏さまのどこさ行つて地藏さまに、

「博奕うちあ出っから泊つて、鶏の真似しろ、そうすつど、銭みな置いて逃げて行んから、その金持つて行くように泊れて言わっで泊つて来たどこだ」

て言うど、ばば、

「それあええことだ」

て、隣の慾ふかばば、

「ほんでは、おれも団子拵つて転ばして行くべ、そして金もうけすんべ」

て言うもんで、団子をまるめて転びもしないけずうな、コロコロとはあ、やつと転ばして行つたどこよ。そしたばやつぱり、

「団子どの、団子どの、どこまでござる」

「御山の堂まで、まかる」

て、コロコロ転ばして行つたれば、地藏さまいたけざあ、

「団子転んで来ながったべか」

て言う。

「転んできたけがら、焙つて食つたから、晚げ泊れ、博奕うち来つから、鶏の真似して錢もつて行げ」

て言わつて、

「これあええごんだ」

なて、ばば、二階の上さあがれとも言わねな、肩さ上がり、頭さ上がりしてはあ、上がつて、二階さ上がつて行つて、かぐつで藁の中さ入つて隠つていたげんど、鬼どもあ来て、

「なえだか人くさい。今日あ、人あ来て隠つていだんでないか」

て言うから、

「ほでない、小鳥焼いて食った匂いだべ」

て、地藏さま言うんだから、またそうして博奕打ち始めて、そうすつど、ばば片ではあ嬉しくなつて、二階さ上がつて、早っからはあ、「パタパタ、コケコー」
て、下手に言うてあつたど。

「なえだか、昨夜の鶏ゆんべなと別なようだ」

ていたら、また「パタパタ、コケコー、アハハ…」て笑つたど。そうすつどこんど鬼共あ「人だ」て言うもんで、二階さガラガラ上がつて行つて引きずりおとして殺さつてしまったど。んだから人の真似しないもんだど。むかしとーびつたり。

(山口すえの)

61 地藏浄土

むかし、このようなどに、じじとばいだけど。冬の寒くなった時、粉をはたいて団子を拵えて、うまく団子拵えてはあ、じじとばは、夕飯に食ったど。そしたば一つあまったけど。

「あまった、じじ食え」

「おれ、たくさんだ、ばは食え」

じじ食え、ばは食えているうちにはあ、コロコロと圀^{ゆる}裡^りの隅^{すま}こさ落してやっ
たど。そしたばそいつあ、その穴からコロコロと縁の下さ入って行ってしまう
た。むかしの人もんだから…。

「もったいない、一つ団子落していらんね」
と。

「その団子さ追かけて行かんね」
て、縁の下さ、ずっと追かけて行つた。そして行つたれば、地藏さま立ってい

たけな、

「地蔵さま、地蔵さま、いま団子転んで来ながつたべか」

て言うど、

「ああ、転んで来たげんども、おれ、もったいないと思って拾って食ってしまつたはあ」

てな。

「そのお札に、おれ、すつから、お前ここさ泊れ」
とな。

「明日の朝早く、夜明けないうちに、鬼どもあ来て、博奕うちすつから、そんな、二階さそつと隠つで、そうしてはあ、鶏の真似しろ」

とな。そう教えらつで、そこさ泊つて、早く鬼共あ来て、一生懸命で博奕、
デッチ十六 カマカイボウ

清水をさせば 抜けるとき

て、博奕ぶちだじもなあ。そしてはあ、

「あら、大抵一番鶏鳴いてもええなあ」

て、打扇で。パタ。パタ。パタ。パタとして「コケコッコー」

「ほら、一番鶏鳴いたぞ、ほら、みんな早くしろよ」

よつぽど経^{もよ}つて、また打扇で。パタ。パタ。パタ。パタしては、「コケコッコー」

「ほら、二番鶏鳴いたぞ、早くみんな一生懸命でしろよ」

そして一生懸命で博奕打ちだけざあ、また時間、ちやうどええく来た頃に、ま

たまた、「パタ。パタ。パタ。パタ。コケコッコー」

「ほら三番鶏あ鳴いた、夜明け、みんな帰れ」

てはあ、ここさいっぱい銭出したのはあ、鬼どもなもんだから、しまわねで、

ガラガラ行つてしまったぞ。

そうしていつど、地藏さま、

「ほら、お前、銭を皆持つて、そして帰つて行け」

と言わつて、その銭。べろつとさらつて、帰つて来たぞ。んだから、食いものざあ大事にして、そういう風にしてどこまでも追かけて行つても何してもお粗末にし

ないようにして、地藏さま拾つて食つて呉つじやもんだからええがった。そのお札に銭いっぱいもらつて歸つて来たなだけど。むかしとーびつたり。

(佃 する)

62 ねずみの金干し

山さ火野^{かの}うないに行つたど。そしたらねずみ、穴から出はつて来て、いっぱい札喰わえてきて、ねずみは金干したど。そこを煙草のみながら、金干し見つだどな。そして金いっぱい干して、しまいに人形立ててつて、

「雨降つて来たら教えろよ」

て、立ててつたつて。そしてその暇に、金かっぱらつて歸つて来たど。そいつ金いっぱいかっぱらつて逃げてきたもんだから、家さもどつてきて、それを話したところあ、その隣の慾ふかばさま聞いてつて、

「おらえのじじもやんなね」

て、やったわけよ。そして火野うないに行つたば、やっぱりねずみ穴から、いっぱい札喰わえてきて、干したつて。そして人形立てて、

「雨あ降つて来たら、教えろ」

て、その人形立ててつた。そして。これあしめたもんだと思つたげんども、小便あ出てきて、小便たつたところあ、皆ひつかかつたつてよ。そしたば、

「雨よ、雨よ」

て言うたば、みなねずみあ出はつてきて、しまつてしまつたてよ。そうして、スツカラピンになつて家さ戻つて話したところが、そのばばに、しこだまおんつあつだつてよ。

「そのぐらいの腐れじじ、あつたもんでない」

て、おんつあつだつて。んだから、あんまり慾ふかするもんでないて教えらつじやなよ。とーびつたり。

(鈴木ひろ)

63 金の化けもの

むかし、こげなどこに大きな家あったつてよ。そこに化けての出っこんだど。夜、夜中になつど、白い顔面つらしたものに、赤い顔面したものに、出っこんだど。

「そいつ、何だか見やらかしに、行つて来い、お前行つて来い」

と言うげんども、行かんねわけだ、誰もな。そしてある荒い人だべ、

「ほんじゃ、おれ行つて泊つて、見やらかして来る、今晚」

て行つたけど。そして行つて泊つたけど。そしてはあ、座敷さ寝せてもらい申した。そしてたれば、「何にも出ねどれなあ」と思つてな、いたれば、二時か三時頃になつたれば、すうつと戸を開けるど。そして、

「さあ、これ、このことかな」

ていたれば、白い顔面したの出てきた、恐つないけつて言うけども、寝つだつてよ。そして寝てるうちに夜明けた。

また、「今晚も一晚泊つてみんべ」と思つて泊つた。そしてその晩また二時か三

時頃の夜更ける頃になつたれば、またすうつと戸開ける音する。「またこれなあ」と思つていたらば、赤い顔面したものが出てきた。何にもしないで蒲団かぶつと知しやね振りして寝て夜明かしてしまった。そして、これは変なもんだなと思つて、次の日、家から立たないで、そして誰もいなくなつたとき、戸の陰さ行つて、賢い人であつたべ、板尻をはがして、そして掘つてみたど。そしてみたところが大きなカメなんぞ埋まつて、中さ、銅銭がいっぱい入つて、そしてもう一つ大きいカメあつて、それさ銀貨がいっぱい入つてなあ、あつたけど。そういう風にあつたもんだから、その人はそれを宝ものにした。荒い人には敵わねもんだ。度胸のええ人には敵わねもんだど。化けものなんざあ、そういうもんだど。むかしどーびつたり。

(佃 する)

64 豆じじいと草じじい

豆じじいと草じじい、両方似たくらいなじじい居たけど。そうしてその二人が川さヤナかけてはあ、毎日魚引かかるな取りに行ったら、草じじいの方さ、ちっちゃなクイゴコかかったれば、

「こんなクイゴコなど、いらね」

て、ひよいと投^ぶつたれば、豆じじいの方さ行^いって引かかったから、そして豆じじいあ来て、

「めんごいクイゴコ引掛^かってだ。家さ持つて行^いって育てて…」

て、家さ連れでって、じじとばばでめんごが^つって育てていたど。そして段々に大きくな^つたもんだから、大きくな^つて或る日、のられるくらい大きくな^つたど。そして、

「じじとばば、おれどさの^あって歩^あいでみる」

て、背中さの^あって、鍬^{くわ}つけたり、さまざまつけて、そしての^あって行^いったごんだ

ど。そして畑さ行ったら、

ここ掘れ、ワンワン

ここ掘れ、ワンワン

て言うんだから、一生懸命に掘ったれば、宝物あいっぱい出はつてきて、そしてそれをカマスさつけだりして、家さ来て、畑から掘り出したもんだから、干したれば、隣のばば、

「火、呉ろ」

て来たど。

「いやいや、こっちの家あ、たいした宝物なもんだした。なじよして求めたもんだ」

て言うたら、

「おれ家のクイゴコ、のつて歩いて言うから、のつて行ったらば、裏の山さ行つて、ここ掘れワンワンというから、掘ったれば宝物あ、いっぱい出はつてきた。そいつあ持つて来たんだ」

て言うたらば、

「ほう、したらええごんなんだし、おらえのじじも、借りらせて行つてみんなへ」
犬貸したくないけずげんども、貸せていうもんだから、犬借つてつて、そして
なんぼ歩^あえべとも言わねのさのつて行つて、そして行つたげんども、掘れとも言
わねの、一生懸命で掘つたれば、いや、

ババの前さ牛の糞

ジジの前さ馬の糞

ビタカタ ビタカタ

と出たばかりで、何にも出ないものはあ、ごしやえで、犬あ殺してしまつたど。
そうしてそこさ墓じるしに木植えではあ、隣のじじいは、なんぼ待つてでも犬返
さねもんだから、催促に來たらば、

「犬など、さつぱり宝物など出ないけあ、ビタカタと牛の糞など馬の糞などばり
しか出ないから殺して、木植えてきたから」

「むごさいことさつだもんだ」

なて、行つてみたれば、木は大きくなつて臼になるくらい育つていたもんだから、それを切つては、臼拵つて、そして餅搗つかなあと思つて、餅搗いたれば、いやあ、ザクモクザクモクと小判が出んにも出んにも、大したいっぱい小判が出て、それから、そさまた隣のばば、

「火呉ろ」

どかて来て、

「いやいや、大した小判なもんだした、まず」

「臼で餅搗いたれば、いっぱい小判が出て来たけぜ」

「ほんじゃ、おらえのじじに借りらせて、おらえでも搗いて見なねから、貸してやつて呉れねが」

て、そうしてこんど、臼借つてつて餅を搗いてみたげんども、これもまた同じにはあ、

「ババの前さ牛の糞、ジジの前さ馬の糞、ビタポロ、ビタポロ」

としか出ないなだど。そうしたればごしやいやけて、「こんなもの、ほんに」て、

割ってしまったて焚いてしまった方ええて、割ってはあ、カマドさくべてはあ焚いてしまったど。

そしたらまた隣のじじあ催促に来て、

「臼、なして呉んないか」

て言うたば、

「そんなものはあ、さっぱり何も出ないから、ごしやげつから、割って焚いてしまった」

「いたましいことさつじやもんだ、臼あ。ほんじゃ灰あくばりももらつて行んかなあ」
て、灰あくもらつて行つて、そして、なじよな拍子だったんだか、その灰あふうつと飛んだれば、大したきれいな花、枯木さ咲いたごんだつて。

「いや、これは大したもんだ、ほんじゃ、殿さまでも通つどき、花でも咲かせてみせんべ」

て、木さ登つていたど、殿さま通つて行んから、

「花咲かじじい、花咲かじじい」

て言うたば、

「そんでは、枯木さ花咲かせてみる」

て言わっで、

チチンブンブン

こがね
黄金 さらりん

と、灰撒いたれば、いや咲いたにも咲いたにも、みな花咲いて、大した御褒美
いっばいもらったけど、そうしてまた隣のじじとばば聞きつけて、また、

「おれも一回真似してみっかなあ」

て、木さ上って

「花咲かじじい、枯木に花を咲かせてみせる」

て言うたら、殿さま、また、

「先度もきれいだけから、また咲かせてみせろ」

チチンブンブン

黄金 さらりん

とすれば、さっぱり花咲かね、殿さまの目さ灰入まなくって、ほうして、これは偽者だ。だって木から引張り落さつてはあ、とんな目に会つたけど。んだから人の真似したりしねもんだけど。とーびつたり。

(大石きみよ)

65 くいごこむかし

むかしあるところに、じいさんとばあさんが、下のじいさんと上のじいさんがいて、下のじいさんと上のじいさんがヤナ掛けて、雑魚とりしたわけだな。そして上のじいさんが行つてみたら、雑魚さっぱり掛んねで、くいごこ掛つていたぞ。そうすつど、

「こがえなもの掛つてざあ…」

怒って、そのくいごこ放げて、そしたら下のじいさんのヤナさ掛つたわけだ。

そしたら下のじいさんが喜んで、

「むごさい。子どももないし、そんでは子どもの代りに育てる」

て、拾ってきて、ばあさんと二人で、まず大切に育てたど。そうしたら、大きくなつて、うまいもの食せらつじやもんだから、大きくなつて、そしてあるとき、

「山さ遊びに歩^あえべ」

て言うから、

「山さなの、とても年寄りで登らんねから行かんね」

て言うたども、

「ほんじゃ、おれの背中さのつてあえべ」

て、そして皆つけて、道具、掘るもの、チョウナからカマスから、その上さのつてじいさんばあさんのせて、そして行つたそうだ。そして高い山、森のようなどこあつどこさ行つて、「ここ掘れ」て教えらつで、じいさんが掘つてみたら、いろいろ小判だの、むかしのお金ざくざく出たど。

「ばあさんもこつち掘れ」

これさも、また出たわけだ。そしてまずカマスさ入れていっぱい持って下がつたどな、家さ。そして洗って乾かして、そしていろいろなもの買って、楽しんでたどさ、隣のじいさん、ばあさんが「火無くしたから」―むかし火打ちで叩いておこしたもんだから―火もらいに来た。「火なくしたから、火呉つじえおくやい」て来たほだ。そして火もらって、

「こつちの家では、何していろいろなもの求めたごんだ、お金を」
て。そしてところが、

「くいごこ拾ってきて、くいごこ、なえだことだか拾ってきて、そして子どもの代りに育てたら、大きくなつて山さ遊びにあえべて言わつて、まず行つて、ここ掘れて言わつたから、掘つてみたらお金が出た。そいつを持って来て買って、まづ富貴で、こうして暮している」

て、ばあさん言つたど。

「ほんじゃ、そのくいごこ借りたい」
て、ばあさんが…。

「貸さんない、むごさいから」

貸さんないて言うたげんども、「貸せ、貸せ」つてばあさんが無理無理持つて行つたずだな。そしてじいさんとばあさんがつれて行つたげんども、そのくいごこが動かねずもの。あきらめてはあ。無理無理、山さつれて行つたわけだな。まだ動かなくなつてはあ、どさも行かんねくて、

「ようやくここで休んだから、ここ掘れ」

ずうごんだべと思つて掘つたそうだな。そうしたら、石ころだの蜂の巣などばり出はつて来て、お金さつぱり出きなかつたど。そうしつどはあ、きめてはあ（怒つて）、そのくいごこ殺して埋めてはあ、そさ松の木一本植えて来たど。そして歸つて来たんだし、うまいものも食わせるべと思つて、まず行つたそうだ。

「くいごこ返してもらいたい」

て。そしたらはあ、

「お金など出つどこない、石のようなものから、蜂のようなものばり出てきて、あがえなもの殺してつぶして埋めて、そのしるしに松だけ植えて来たから行つて

見てこい」

て、こう言わっただ。そしてじいさんが泣き泣き帰ってきて、そしてばあさんと二人で行って見たら、松の木あおがって大きくなっていただ。そしてその松の木を切ってきて、そして昔、ありやスルス、そいつで挽いて、刎入って挽いたな、皆小判になつて出はつた。そしてまたそいつで買物して、うまいもの買つて来て、じいさんとばあさんが御飯たべた。また隣のばあさんが火もらいに来た。そして火もらいに来て、

「どがえして、こがえにお金とつた」

て言うたら、やっぱり、

「松の木植えて呉つじやな、おがて、だから切つて来て、そしてスルス拵こしらへって、刎挽いたところがみな小判になつて出た」

そんで、

「スルス貸してもらいたい」

て、隣のおばあさん。そしてスルスを貸さんないずな、無理無理借りて挽いて

みたら、これも始末のわるいものばり出きて、ええもの出来ねがった。と、これ
もきめてはあ、じいさんが割って焚いでしまった。そしてまたすぐ返してもら
いたいて、じいさんがとりに行つたところはあ、

「スルスなど、あがえなものの金などさっぱり出ないで悪いものばり出たから、焚
いてしまったから。そこさ灰置いたから、灰でも持つて行つて肥料にでもしろ」
こやし

て言わつたそうだ。そしてまた泣き泣きはあ、その灰もらつてきて、そしてやっ
ぱりじいさんが味つけたがして、花咲かせに出きたわけだ。そして枯れた木のあつ
どこさ、花咲かせていたら、お殿さまがお通りになつて、

「そこにいたじい、何じいだ」

て言わつて、

「花咲かせじいだ」

「枯木に花を咲かせられつこんだら、咲かせてみる」

て、そしてやっぱり、

アヤチュウチュウ コガネサラサラ

チチンプンプン

て、灰振ったら、見事に桜だか梅だかみたいな花が咲いたので。そして殿さまは、「みごと、みごと」で囃して、そしてまず御褒美たくさんもらってきたてな。そしてまた家さ来て、いろいろまいもの買っていたどこさ、隣のばあさんが、火をもらいに来た。

「どうしてこがえにお金もうけた」

て言うたら、

「お前のどこから、スルス焚いた灰もってきて、おらえのじいさんが、花咲かせていうて、そしたらお殿さま、下通ったとき、花咲かせたら、御褒美たくさんもらってきた」

そしてこんどその灰、まだ残っていたなもらって、じいさんが持^たって行ったわけだな。その枯木んどこさ、そしたらお殿さまお通りになって、

「そこさいたじい、何じいだ」

て聞かつじやど。

「花咲かせじいだ」

「枯木に花咲かせられっこんだら、咲かせてみる」
て言わっで、これもまた、

チチンブンブン、コガネサラサラ

パラリン

て撒いてみたげんども、灰、灰で。パアパアと吹飛んでお殿さまの目さなど入っ
たど。そのためにはあ、罰うけて、そして御褒美ももらわねで泣き泣き家さ帰っ
てきたど。とーびったり。

(男鹿てつの)

66 こぶとり

むかしあつたけど。

あるところに、おじいさんとおばあさんがいて、両方のおじいさんがコブ持っ
ていだけど。おじいさんがある日、山さ行^いつて畑仕事して、雨あ降^ふつてきたもん
だから、洞^ほさ入^いつて寝^いつたれば、鬼あ出^いてきて、いや一生懸命できて、踊^{おど}るは歌
うは、とてもおじいさんがこたえらんねくて、嵌^はつて踊^{おど}つて歌^うつて、はまったど。
そしたれば鬼あ、

「これは面白いじじだから、頬たぶさ喰^く付^けいてるコブとつて呉^くれ^いつから…」
て、取^とつてもらつたごんだけな。そして家さ来^きたらば、隣^{とな}のばば、

「火呉^くろ」

て来^きて、

「なんだもんだ、こつち家^えのじじあ、コブさつぱりなくしてしまつたもんだ」

「んだ、おらえの山さ行^いつて、こういうごんで、鬼どもあ来^きて、あんまり歌^うつた

り踊ったりするもんだから、おれも混つて、そして唄ったり踊ったりしたれば、コブ取つて呉つじやど」

「ほんじゃ、おらえのじじもやらんなね、灰などばりはじっているから、やんなね」

て、次の日、じんつあばやつたど。そしてまた赤鬼、青鬼来て、一生懸命で踊ったり歌ったり、じじあ、

「こん時だ」

て、出はつて踊つたげんど、大した下手なきんこんであつたど。踊りあ。

「なえだ、じじあ、昨日のじじと違つて下手だ」

て、その前の日取ったコブ、ベダンと喰付けらつて、そして両方さコブ喰付いたど。とーびつたり。

(大石きみよ)

67 猿 地 蔵

むかしあつたけど。

じじあ行つて一生懸命で畑をして、あんまり畑うないして、こわいもんだから、寝っただれば、猿あ来て、

「あららら、おらえの辺りの地藏さま、こんなどこさ来て、寝っただれ」

て、そしてこんどあ、川向いなもんだから猿どもはあ、かついで川越し、したれば、じじあ屁むぐしたずも。そして、「鳴ったはなんだ」「時の太鼓」。そしてこんど降りて来たらば、「下がったはなんだ」「延命こん袋」て、そしてじじをかついで来て、建て申して、いっぱい御馳走あげてはあ、猿どもあ^{おが}拝申して行つたどこだど。そうしてその宝物から、さまざままいものもらつて来て、家さ置いっただらば、隣のばば来て、

「火呉^くろ」

て来たもんだけど。

「あらら、なんだべ、こっちの家のさまざまなもの、宝物か、何なもんだべ」

て言うもんだから、こういうごんで、じじ畑さ行つて寝つたれば、猿どもあ来て、そうして川越して地藏さまと間違わつではあ、建ててそさ御馳走あげて行つたもんだから、じじあもらつて来たどて。

「ほう、したりしたり、おらえのじじあ灰^{あく}まらばりはじつてて、さつぱりその氣あないもんだから、おらえのじじもやつてみんべ」

て、じじどこ、同じに川向いさじじ行つて寝つたれば、猿どもあ来て、

「ああ、またこがえなどこさ地藏さま出つたでこ、また川越してあっちや建て申さんなね」

て、そしてこんど、じさまかついで川越したら、また同じに屁むぐしたらば、
「鳴ったは何だ」「時の太鼓」。そして来てはあ、「さがったは何だ」「延命こん袋」
て言うたもんだから、じじは可笑しくて笑つたど。

「いやいや、これあにせものだ、地藏さまでなかつたでこ」

て、川さザボンと投げらつてしまつたけど。んだから人の真似てさんねもんだ

けど。とーびったり。

(大石きみよ)

68 見るなの座敷

道に迷って行つて、泊めてもらつて、

「決して見ないで呉ろ」

て、ええ姉さまが、「毎日、おまえが留守居してで呉ろ」て言わつて、その、馬さのつて、トット、トットと。…美人だつたてな、その美人が、

「決して、この座敷の、一番入^いりは見ないで呉ろ」

て、言うどこだけな。そして毎日、二十一日、女が馬上の女になつて、八幡詣りに行く。その留守してるとき、その座敷、「見んな」て言われればいっそ見たくなる。その二十一日、戸ガランと開けて、パチンと閉^たてて、見たらカメある。カ

メコさ何入ってだかなあて、開けて見たら、甘酒のなりもじりみたいによ、プク
プク、プクプクてよ、鳴っていたなあつたど。

「こげなもの、酒のこじれか、甘酒のこじれだべなあ」

ていだったら、その女あ帰ってきて、しおしおとして帰ってきた。

「いやいや、おまえに座敷は見ないで呉^くろて、あのように頼んだげども、見らつ
でしまった。実はおれは決して人間でない、鶯の化身であつた」
て。

「二十一日、願かけて今日が満願で、今日一日、あなたに見てもらわなければ
人間になれるのを、人間になりかねたもんだ。あまりにも残念であつた。ホー
ホケキヨ、ホーホケキヨ」

てはあ、行つてしまわつて、そして見たら山の奥で、林の中で、どき行つたら
ええか分んねではあ、大変難儀して、その人は困つたけど。とーびつたり。

(山口ふみ)

69 笠 地 蔵

むかしあつたけど。

あるところに、じつちやとばつちやがいて、二人でその笠を縫って暮していたど。二人あ。そしたらお正月あ来て、買物に行つてくると、笠を背負って行つたそうだ。そしたら六地藏さまの道を通るとき、お正月近くだから、ミゾレあ降つて、寒いお天気であつたそうだ。

「やれやれ、なあ、おらだは食いものあないばりで、雨しのぎはあるわけだ。地藏さまは雨しのぎも持たないで、哀れだから……」

自分が売りに行く笠を降ろして、そして、地藏さまさミノを着せては笠をかぶせ、自分の背負つたな、みな六人さ着せて、かぶせてしまった。そして買物もしないで戻つて来たど。

「何買つて来たか」
て、ばつちや、

「今日は寒い空でミゾレあ降ってひどいから、道傍行ったら地蔵さま六人立って
いやったどて、あまり寒いから地蔵さまにミノ着せて、笠かぶせてみな置いて来
た」

そしたら、ばっちゃんが、

「いやいや、ええことした、ものを助けるざあええごんだ」

て、ばさまは本当に喜んで、

「おらだなど、こうして寒い思いもしないで暮していつから、食いものなど、お
正月のものなど何も食ねったってええ」

て、ばっちゃんも喜んで二人で、まずお正月きたげんども休んで、その夜休んで
いたら大したダイモチの音あする。

「何だべな、大したダイモチの音あする。木挽きではあんまいしな」

て、二人でまず不思議立てった。そしたら自分の家の近くまできて、ちょうど
じじとばばどこの前さ、ダイモチを降ろして、

「じじ、じじ、ばば、ばば、寒いとき、ミノカサつけて、雨しのぎさせてもらっ

たから、その代りに唐戸を引いてきたから、その中開けてみっど、何でも望みのものあつから、早く出はってみろよ」

て、帰っていったそうだ。それからじつちやとばちや起きて出はってみたら、大きな唐戸開けてみたら、いろいろ餅のようなものから、お正月の仕度のものから、みな入ってだ。

「いやいや、ありがたい、ありがたい」

て、家さ入つで、じつちやどばちやは立派なお正月していただき、こんど隣のばちちやが来た。

「寒いから、火呉ろ」

「ええどこでない、火など持つて行け」

「いや、こつちの家で、どうしたわけでこがえに立派な、うまいものから、いろいろ、さまざまええ着物ある、なじよなだ」

て聞いたら、

「じいちゃんが、きのうお正月の買物に行ったとき、六地藏さまが、ミゾレにま

けて寒そうにしていたから、買物しないで、みなミノとカサを着せたりかぶせたりしてきたどこだった。したら昨夜、こういうもの持って来て、置いて待つじゃ」

「いやいや、ええことなんじゃ、そんじゃおらえのじつちやも明日やつて見んなね」

て、ばあちゃんが帰って行つた。そしてじいさん方さ、

「隣のじいさんなの、 কিনな買物に行つて、ミノカサ持つて行つたげんども、みな地藏さまさ着せたり、かぶせたりしてきた、おまえも行つてきたらええべ」

そうすつど、じいちゃんも行つたごんだど。これはたんと稼がねもんだから、じいちやとばあちやがミノ、新しいのないもんだから、古いの持つて行つたそうだ。そして行つてみたらやつぱり、雨に濡つたり、雪さ掛つたりして、地藏さまいた。そいつさ古いミノとカサかぶせたりして、そしてまず帰つてきて寝つたそうだ。そしたら、またダイモチの音あする。「奇態だな、不思議な地藏さま、ほんではこんど、唐戸をひいて来てくつじゃようだ」

て、じつちやとばつちや出てみっだど。そしたら唐戸を引いて地藏さま来たど。

「じつちや、じつちや、昨日きんミノと笠をかぶせて着せてもらったから、戸開けてみてくろ」

て、そう言うてお庭さ置いて行っただはあ、そうしてこんど何かうまいものから、いっぱい持ってきたと思つて、じつちやとばつちや開けてみたら、蛇からいろいろなケモノから皆出はつてきた。じつちやとばつちやどき掛つたど。そしてはあ過ちして泣いていたどき、隣のばあちやどじつちやがきて、

「なして、おまえ方泣いでる」

そしたら、その、

「地藏さまさ、お前でミノと笠かぶせて来たなで、いろいろなものもらつたて言うから、おらえのじつちやも行つて、かぶせて来たなで、いろいろなものもらつたて言うから、おらえのじつちやも行つて、かぶせて来たら、地藏さま、唐戸ひいて来たなさ、こういうもの入つて、そうしてはあ、過ちして泣いっだどこだ」
んだから、人の真似はするもんでないど。とーびったり。

70 笠 地 蔵

むかしあつたけど。

あるところに、じじとばばいて、じじあ正月買いに、まいどミノを着て、笠をかぶって行つたけど。莫蔭を着て。そして行つたれば、地藏さま雪にかかつて、雪まびれになつていたもんだから、あんまりむごさいと思つて、笠をかぶせて莫蔭を着せて、そしてはあ、買物しねではあ、家さもどつて来て寝つたれば、夜になつたれば、

よいともしよ、よいともしよ

じじの屋形はここだべか

ばばの屋形はここだべか

ていう音あするなだど。

「音あ何だべな、ばば、ばば、何か引張って来たような音あする」

どかて、聞いったら、だんだんその音あ、「よいともしよ、よいともしよ」て何か引張って来たような音あする。そのうちに「ドサドサン」と何か家の中さ投げ込んだような音あする。そして見たれば、いや仰山な、いっぱい宝物あ、地藏さま持して呉っじゃけど。そして次の日その宝物眺めっじゃれば、隣のばば来て、「おお、したり。何ごんだまず、この宝物なにしてもらったもんだ、どっからもらった」

なて言うんだから、

「これ、地藏さま、あんまり寒そうだから、着せたりかぶせたりしてきたらば、これ持って来て呉っじゃどれこ」

そしてこんど、

「まず、ほんじゃらば、おらえのじじも、灰まらばりはじつていつから、やって見なね」

て、そして行つたれば、地藏さま、さっぱり雪あないうけつげんどはあ、びりびりとかぶせて着せたりしてきた。そして、夜何か引張つて来た音すつから、何かいっぱい宝物呉つじやがなあていたら、さっぱり宝物なくて、瀬戸かけでござるの、さまさまな投げ込んで行つたけど。んだから人の真似てするものでないけど。とーびつたり。

(大石きみよ)

71 脂 と り

ここのようなどこに、稼ぐ嫌いな息子がいたけど。稼ぐきらいで、そしてその神さまさ願かけたけど。

「稼がないで、うまいもの食つて暮される方法ないべか」
て、その神さまさ行つて拝んではあ、そしているうちに、その神さまの縁鼻さ

眠ったそうだと。そうすつどその神さまは教えておくやった。

「この、ずうつと裏道行ってみろ、そうすつじど、稼がないでうまいもの食せて呉れる家あつから、ここずうつと行ってみろ」

と、その、トロトロと眠つど、神さまに教えられ申したど。そしてポイツと目覚めてみたところが、縁鼻さ眠つてだけど。そして行つて見たど。そうすつど、
「教えらつじやから、行つてみつかない」

と、その道だんだんと行つてみたれば、なるほど大きな家あるけど。そしてそこさ入つて行つて、

「今夜、泊めておくやい」

て言うたれば、

「あまりええから、泊めておくやい」

いや、うまいもの食せておくやつて、唯何だじもなく、うまいもの三度に三度うまいものなあ、

「これはええことなもんだ」

と思つて、二日三日経つたそうだ。そして、ほら、退屈になつたもんだから、ずつと裏さ出はつて少し行つてみたど。そして見たところが、この裏に長く大きく建物あつたどな。

「何だべなあ」

と思つて、その傍さ行つてみたところが、

「助けて呉ろ、助けて呉ろ、あついあつい、助けて呉ろ、助けて呉ろ」

なて音すつじも。

「あら、異^いな音するもんだな、これ……」

と思つて、そこさ行つて、そつと覗つて見たところが倒さにさつで、下さ金^{かな}もの置いて、下からボンボン、ボンボンとあつく火燃やしてはあ、さんざんうまいもの食つた人を、倒さに吊るして、人脂とりだけど。そうすつどその人、

「さあ、大変だ、こげなどこにいられるもんでない、おれあうまいもの、うまいもの食せらつで、こうして人脂とりされんなであつた。こんなところに居られるもんでない」

と思つて、まず逃げんべと思つて見たところが、逃げらんねがつたど。ずうつと塀廻さつていたけど。んだげんども、その人が何とか逃げた。

んだからそんなずるい氣をして、稼がないでうまいもの食^くだいもんだなて神さまに願かけだたて分んねどな。んだから決してそういうことするもんでないど。一生懸命に稼がんねからな……。むかしとーびつたり。

(佃 すす)

72 角屋の三平

むかし、角屋の三平とかいう人は、一人ぼっちで暮らしていて、今でここらで悲しがり(仕事きらい)で貧しく暮しつたど。そしたら長者の娘、大した娘いて、それお嫁に欲しいげんども貧しくて、仕事ぎらいだし、来るつて言わねし、もらうもさんね。そうしているうちに教えた人あつたそうだ。三平に……

「年度の朝げに早く起きて、暗いうちに神詣りに行って、神さまの高い杉の木の上さ、提灯、山鳥の足さ提灯つけて、そしてその鎮守詣りに長者が来て、拝申したとき、神さまになり代って『長者、長者、角屋の三平に娘を呉れないで、長者の跡はなくなる』て言うて、その提灯飛ばしてやれ、そうすつど、その、飛んで行んから…」

そいつ聞いて、杉の木の上さ登って、提灯を持つて、提灯さ火点けて、長者、拝申すとき、そう言うて、

「長者、長者、角屋の三平に、お前の娘の小菊を呉れないで、長者の跡あ絶えるぞ」

て言うて、提灯とばしてやったど。そうしたら、長者、「はい」て、神さまお礼釈して、そして呉れ申すて、礼釈して帰ってきたわけだ。

「光りものは飛んだ」

て言うたそうだ。そして帰って来てはあ、その娘を三平に仲人たのんで呉れたど。んだから賢こい人には敵わね。とーびつたり。

73 けちんぼの話

魚屋来るたんびに、^{いさば}「何買った、なんぼ買った」て、けちんぼは決して買わな
がったど。そして、「隣でなんぼ買った」て、決して買わねで、その錢をすっかり
貯金して、そしてこんど、どさか旅に行ったとき、財布あ海さ落してしまつたど。
そして、また買ってくれる家さ、大きな魚売って行つた。そこで買った魚の中さ
いて見たら、その財布、そくつと入つたけど。んだからあまりケチなことしね方
ええど。

74 和尚と小僧・小僧殺し

むかし、ある寺に賢いお小僧さんが三人いでやったそう。和尚さんは寺だから、生臭食んねもんだから。数の子味噌を拵って、そうしてカメさしまつて和尚さまばりなめていた。小僧になめさせねがった。

「これは、和尚さま、和尚さま、いつでも何か珍しいもの舐めてやっから、何ずうもんだ」

て聞いたそう。そしたら、

「これは大人の食べるもんで、小僧食べつずど、小僧殺しというて、食べらんねもんだ」

て教えらつた。そうすつど、小僧さんがたは三人そろってみな食べたくて仕様ないな、子どもだからな。

和尚さんはお法事でも招ばつて行ったがな、留守な時、
「三人で座敷掃除して、座敷掃除してから、お経あげろ」

て、座敷掃除しつたずも。そうすつど和尚さま大切にしつた植木鉢を落してこわしてしまつたど。

「いやいや、困つたことした。和尚さま帰つて来たら、こら、なんぼおんつあれつか知んねなあ」

て、まず三人で思案していた。そしたば、だんだんに考えて、

「いやいや、おれええこと味付けた。和尚さま、小僧殺しという薬を舐めでつから、そいつ舐めで、おらだ死ぬことにしたらええがんべ」

て、賢い小僧さんが：。「それ、ええがんべ」て、カメを出して舐めてみたら、うまくて、みな舐めてしまつたど。

「さあ、これあ困つたことした、和尚さま来たら、これも鉢と同じにおんつあれ」

それから、座敷さ行つて、こんど味噌のカメから、そつと味噌とつて、お釈迦さまの口さ塗つたど。そしたら、

「お釈迦さま、叩けばカーンて言うから、そうすつど、お釈迦さま食つたでない

わけになるから…」

「ええから」

て、お釈迦さまの口のぐるりさ塗つて来たど。そして休んでいたれば、和尚さま帰つて来て、

「なんだお前がた、おれが一番大切にしつつた植木鉢こわしたでないか」

「和尚さま、座敷掃除しろつて言わつたから、掃除すつどき落してこわしてしまつた。珍らしいもんだで、三人で、あつちや行き、こつちや行きして見た。そうすつど取落として手落したから…」

和尚さま、こんど数の子味噌なめつかと思つて行つてみたら、数の子味噌、カメにさつぱりなかつたそうだ。

「なんだ、小僧、お前から、おれの拵つてだ薬を舐めたでないか」

「いや舐めねし」

「いや、舐めた。さつぱりなくなつたから、どつからか来て、舐めであんめえから、お前がたに相違ない」

「なんだか、ほになあ、お経あげた時に、仏壇の方からミチミチて何か騒ぐような音しったけあ、お釈迦さま来て、舐めて行つたでないかな」

て言うたど。そうすつど和尚さんは座敷さ行つて、

「いやいや、和尚さま和尚さま、口のぐるりに味噌いっぱい喰付いっだ。ほんじえ、これお釈迦さま舐めた」

そうすつど和尚さま行つて、こんどあ、せめたて、金^{かね}だから仕様ないから、て言うど小僧は、「叩いたら、白状すつかしんね」て、木魚の棒で叩いたど。「カーン」となつたど。和尚さまは、「なんで小僧、こりや、お釈迦さまはカーンて言うたぜ、食べたでない」。また叩いてみたら「カーン」て言うたつて。「三度も叩いたげんども食つたて言わねぜ」。そうすつど、

「んだな、叩いたんでは痛くない。金^{かね}だから痛くないから、ほんじゃ大きな鍋さ入つて煮た方ええがんべ。茹でれば熱いから…」

そうすつど大きな鍋さ火を焚いて、まず入つて、金^{かね}のお釈迦さまを入つて茹でたど。そうすつど、水だから、煮だつて来たわけだ。

「クッタクッタ、クッタクッタ」

「ほら、和尚さま、お釈迦さま食ったて言う、熱いもんだから白状したでないか」
て、これも小僧に負けたけど。賢い小僧にはかなわね。

(男鹿てつの)

75 和尚と小僧・フクデ餅

これもお小僧さんで、和尚さまと小僧いで、フクデ餅なあ、そいつを焼いて、小僧、出はった留守に食べたいげんど、いつでも小僧あいるから、食べらんねくて、あるとき山鳥追いたもんだ。冬、吹きのうんと吹くときだど、鳥あとばない、そいつ追い出して、大きな洞あぶらに入ったな、そいつ取って来たもんだ。ここらでも。

「みんな山鳥追いしったから、小僧も行って追ってこい」「はい」

ほうして、出はって行つたな、

「いつでも、おれ留守なとき、和尚さま御馳走拵つて食つてつから…」

裏からそつと寄つて二階さ上がつて見つたど。そうすつど和尚さま、いっぱいフクデ餅を焼いて、ふぐつで、大概食べる頃になつたら、小僧、そうと二階から降ちて来て、

「いやいや、和尚さま、今日の山鳥追い、騒いだばりで取らんねがつた、帰つてきた」

そうすつど、

「いや調子悪がつた」

て、和尚さま、やしやないから小僧出らつで、みな灰あくの中さ埋いけたそうだ。フクデ餅。

「まず始まりには、ここの山から、こう飛んでなあ、和尚さま。ここでこう止つた」

そしたらば、フクデのあつどこさ、火箸刺つた。和尚さま、

「いやいや、ここさフクデが焼かっていた。われ、腹減って帰って来っかと思つて、われに食せっかと思つて焙ぶつて、しまつて置いたんだ」

「ありがとう」

フクデ一つ。

「またそつから、こう飛んで、ずつと行くと、ここの洞ほらさ行つて入った」
て言うど、そこにもまたフクデあつたど。

「いやいや、ここにもある。われ腹減つて来んべと思つて、たくさん焙つて埋けてたんだ。んじゃ、お前に上げつから」

「おしよし」

そしてまた、

「ずうつとここら飛んで、向うさ追わつて行つた。こういうところのアプラさ入つた」

そこにもまたフクデあつた。

「いやいや、和尚ありがとう」

て、小僧にみなフクデ食べらつてしまつたど。

(男鹿てつの)

76 団扇太鼓

神さまさ、唯いて食れるようにて、一生懸命拝んだれば、神さま団扇太鼓というもの呉つじや。そしてこんどそいつで「ポンポン、ポンポン」と叩くとなじよなもんでも出っこんだな。そしてある日お祭りさ行つたれば、きれいだにもきれいだにも、どこのかお姫さままではあつべども、

「あの人の鼻高くしてみつかな」

て、「鼻高くなれ、ポンポン、鼻高くなれポンポン」と叩いたら、いやその鼻の伸びつこと伸びつこと、ぐんぐんぐんぐんと伸びてはあ、そのお姫さま、とつても恥かしくていらんねで家さ戻ったけど。そして家さ行つて泣いっただごんだけ

なあ、あまり鼻高く伸ばさつだもんだから、そしたらば、

「鼻低くされる、鼻低くされる」

て、そこらふれたらば、その家で、

「「そんであ、あの、雇つてけんべ」

て雇つて、毎日「鼻低くなれ」ていうもんで、ちんちんと低くして呉つじやど。

そうして毎日酒を御馳走になつて、うまいもの御馳走になつて、毎日、ちんちんと鼻低くしてもらつて、御馳走食つて楽しつたんだごで。そして鼻も普通になつたもんだから、こんどそつから出はつて、自分の鼻高くしてみつかなどて、

「鼻高くなれ、鼻高くなれ」

て、その団扇太鼓叩いたら、いやその鼻の伸びつこと伸びつこと、匂いのええどつから臭いどつから、ずうつと鼻伸びて行つたごんだけな。そうすつど子どもら、

「なえなもんだか、面白いものある」

て、いや寄つてたがつて、喰付くあかつちやくあ、叩くがしてはあ、大した大

あやまちしてはあ。んだから唯いて食うべなんと思わねもんだど。とーびったり。

(大石きみよ)

77 篩 借 り

朝早く、ばばが座敷を掃いっただんだど。そしたら豆が一つコロコロと出てきたど。それを大した大きな豆であつたもんだから、それを拾ってきて、そしてまず寝てるじじを起して、そして一粒の豆を半分にして、

「半分を種子、半分は黄粉にすべえ」

と言う相談したどな。そしてその半分のをカランカランと煎って、臼に入れたはたいたんだど。そしてそろそろ粉になる頃になったら、篩がないど、

「隣のうちさ行つて借つてくつかなあ」

て言うたら、

「いや、隣の家さ聞えつど、なめられつど困つから駄目だ、んじゃ、じじ禪の端でふるけ」

て言うわけで、じじは禪をはずして、それでふるってだんだど。そしたらそのうちに、そこらの次郎太郎どもが来たんだどな。来るとき喋ってくる音が聞えたんだな。

セイガキ　コガキ

道ノハタノコンモン草

て言うて来たど。そう言うて来る音したもんだから、

「次郎太郎が来たぞ。黄粉みななめられつから、早く何とかしろ」

て言うたら、じじは慌てて裸の尻でかくしたんだど。そしてるうちに屁が出て来たど。そして我慢してるうちに屁が出て来たど。そして我慢してるうちに一発やったもんだから、黄粉がみな飛んで行って、向い山の笹の葉っぱさみな喰付いたんだど。そしたら遊びにきた次郎太郎どもが、そこさ行って、「そら黄粉だ」て言ってなめてる。じじも負けたくないもんだから、裸で走って行って、なめてい

るうちに、笹の葉っぱでキンタマを切つて落してしまつたど。そしたら餓鬼どもがそのタマを拾つて、

「鶏の卵拾つた、これもつて行つて鶏に抱かせつかな」

なて言うて持つて行つて、家の卵と一緒に抱かせつたど。そうしているうちに、何日か経つて雛にかえつたら、普通の卵からむいた鶏は「コケコッコー」て啼くんだげんども、じじのキンタマからむいた鶏は「フンヌケ、フー」て啼いたんだど。とーびつたり釜の蓋、さんすけ。さんすけ頭かしらに火がはねて、ごん助たのんでやつと消し申した。

(井上元一)

78 篩 借 り

座敷掃いたら、大きな豆出はったぞ。そして、

「じじ、じじ、大きな豆出はったぜ」

そしたば、じじあ起きてきて、

「半分は種子、半分は豆の粉にすんだ」

て言うた。そしてこんどあ、半分は種子、半分は豆の粉にすんべて、カンコカ
ンコて、豆の粉にした風だけな。

「ふるうから、篩借つでこい」

て言うたぞ。

「篩借りに次郎太郎さ行くど、黄粉食いに来つから、禪の端出してふるげ」
て言うたぞ。そして禪の端出してふるつてゐるうちに、隣に次郎太郎ていて、そ
いつ聞きつけてきたぞこだけな。

セーガキ コガキ

道の傍のコモン草

鎌にかけてもええよだ ええよだ

て、次郎太郎あ来たから、じじとばあ、

「ほら、次郎太郎来て、黄粉食つてしまうぞ」

ているうちに、じじ屁むぐったごんだどな。そしたら黄粉あボホ、ボホ、ボホ
て藪の笹の葉さ喰ついで、みんな、

「誰それさん、誰それさん、黄粉なめに行かねか、あえべ」

ていたど。そしてペタペタ、ペタペタとなめたど。とーびつたり。

(大石きみよ)

79 尻鳴り扇

むかしあるところに、一人で暮してる、悲しがり、神さまさ行つて願かけたそ
うだ。「稼がないで、お金もうけをして暮すようにしておくやい」て。そしたら神
さま、夜眠^{ねぶ}つていたときに夢枕に立つて、

「お前は稼がないでもうけしたいと言う、おれ、かなわせてやる。この御^おみ坂さ
降るとき、扇あつからその扇を拾つて帰つて行つて、その扇をひろげてあおぐと
あるとこの嫁さまのお尻が鳴るから、そいつを治すと触れて行くしど、そうすつ
どもらえつから、長者の娘だからお金をたんともらつて来られつから…」

て言^たわつて、それから、まず大きな町さ行つて、家の大きなあるところを、扇
を持^たつてあおつたそう^だ。そうすつど尻が、歩くじどピッピッ、ピッピッと鳴る。
そうすつど親たちが困つて、あつちの医者こつちの医者さ頼んで見てもらつたげ
んど、とても医者は治さんね、そうすつど、こんどあずうつと向うから、「女、尻
なり止め」という触れ出して行つたずも。そうすつど、

「女、尻なり止めというお医者さま来た、早く頼んで見てもらえ」

そしてまず頼まっで、

「おらどこの娘、歩きさえすつどお尻が鳴る。

ビクツク ビクツク

チョウコウジ チョウラクジ

キヨミズビツタリ チョウジャモチ

て、歩くと鳴る」

そうすつどこんど座敷のどこさ行つて、そこらさすつてでも見たべちなあ、
そしたら、

「こういうところに、何か音立てるものある、そいつを治さねじと分ない」

そうすつど、扇をこつちさ逆にあおつこんだけど。そしたら止まるつて、そう
いうあんばいにしたら、止まったわけだ。

「さあ、こんどあ治つたようだから、歩いてみてくろ」

そして歩いてみたら、やっぱり音立てなくなつたど。これは名医者だというこ

とになったど。また、よっぽどお金のなくなった頃になつど、扇持つて、お金持ちの前を通り通りしたどな、そうすつどやつぱりそういうあんばいに娘のお尻を鳴っからつて、

「尻とめの名医者だ」

て言うもんで、止め止めた。稼がねで一生食れ^かつこと教えらつじやど。とーびつたり。

(男鹿てつの)

80 山鳥むかし

むかしあつたけど。

山鳥飛んで来たな、おじいさんが道よけに出はつて、山鳥とつて、そして、
「ばば、ばば、これ山鳥とつたから、煮ておけ」

て、毛引いてやったどこだっけな。そしてばば、毛引いて煮て食見たら、いやまいこと、うまいこと、塩っぱいがては食い、甘いのがては食いて、すっかり食ってしまったど。

「これは困ったもんだほに、おじいさん来ないうちに食ってしまったては困ったもんだ」

て、仕様ないからて、自分の尻を切つては、そして煮て、知しやねふりしてだば、じじあ来て、「ばば、ばば、山鳥煮たか」「煮た」て、ばば寝つたどこだけな。

そして、「ばばも食え」て言うたら、

「おれあ、何だか腹痛めて食んね」

て、そしてはあ、じじ食つてみたれば、

「いや、しないこと、しないこと、何だないなごんだ。ばさま、しないこと
て言うたば、

「古いなでもあんべ」

なて、いだったげんど、家の前の杉の木さ鳥来て、

カアカア しないもくさいも道理がな

ばばお尻の片われだ

て語ったどこだど。そしたれば、ばば、「ホーホー」て追うげんど、また、

カアカア しないもくさいも道理がな

ばばお尻だも

て、鳥あ言うたつて、そしてはあじじは、「何だべ、このばばあ、ほに」て、尻^したぐったれば、ばば、血だら真赤になって寝っただけど。とーびつたり。

(大石きみよ)

81 山鳥むかし

朝^あげに早く起きて、そのじじが窓はらいしたら、山鳥が吹きなもんだから、軒場さ突^ふつ伏^ふしたな、獲^とつて、

「ばば、ばば、今朝拍子あええ、山鳥おさえたから、おれ入るまで煮ろ」

て言つて、ばばが煮たわけだ。そして一生懸命になつて煮て塩見つたど。とてもうまくて、うまくて、塩見して、ばば皆食つてしまつたど。そして、そのばばとても脂つこいし、うまくて、じじ入つて来るまで皆食つてしまつた。したら、猫当つてたな、猫殺して猫煮たわけだじも。それにばばのチンコも煮たど。

「たんと、^{しな}撓いもんだ」

て、じじ入つて食べたら、鳥が来て、

撓いもくさいも道理だな

猫のチンコ カタカタ

ばばのチンコもカタカタ

て鳥あ何度もさやずるんで、じじにせめらつたど。んだから、そんな馬鹿なことをするもんでない。むかしとーびつたり。

(後藤とよ)

82 南の山の馬鹿聲・手水を廻せ

（南の山で、むかし馬鹿の出たどこだ、そのあたりは家なて作るようも知しやねから、木と木合わせて、そして木の葉で屋根葺いて、そこに暮していたそうだ）

むかしの殿さまの時代だな、その人あ、南の山というどこあつずから、視察に行つたそうだ。そして、

「尊い人、ござつたから…」

て、みな部落の衆集まつて、そうして大したお料理の御馳走出たど。そしてまづいっぱい集まつて、

「お殿さま、何一番好きでござつたつた」

て聞かつた。そしたら、その、

「どじようさ、背負い牛蒡ごんぼあ悪くないもんだ」

て。そうすつど、みな集まつてはあ、村内の衆、お料理はじめたど。どじよう

とつてきて、牛蒡を長く削って、どじょうさ、一匹一匹さ、みな牛蒡背負わせて結付けたど。そして御馳走になつてくる。

そしてこんどは、朝には、

「チョウズを廻せ」

どかて言うたど。そうすつど殿さまの休んでいた座敷の戸を開けて、みな顔出して、こうして首廻したど。やっぱりそういうどこもあつたそうだという話だな。とーびつたり。

(男鹿てつの)

83 南の山の馬鹿髻・茄子漬

むかしあつたけど。

南の山の馬鹿髻あ、嫁もらつて、嫁の家さ泊りに行つたど。そしたれば茄子漬

のうまいこと、茄子漬のうまいこと、一生懸命で御馳走になって、そしてあんまりうまいから、嫁さんも御馳走すんべと思つて、流しから茄子漬持つて来た。そして「食^くえ」て、嫁の尻さ押つ付けただけど。そして、食^けえて言うたれば、スウーッと屁たっじやれば、

「すかくないから…」

て、嫁の尻さ押つ付けただけど。

そしてそれから、また、嫁がボオーツと屁たっただれば、

「盆までは置かんねぞ」

て食つてだけど。

(大石きみよ)

84 南の山の馬鹿髻・糸合図

南の山の馬鹿髻あ嫁の家さ行つたどこだけな。そしてこんど、嫁、

「おれ、縁の下で『なえはえさよ』（ああ、そうですか）て、話につけつどこあつたら、引張っから」

て、チンポさ縄つけて、そして縁の下さ嫁行つたどこだけど。そしてまず喋つど、『なえはえさよ』て付けつどき、ポツポツて引張つどこだけど。そして先のうちええあんばいに『なえはえさよ』て言うて、引張るたんびに言うけあ、嫁、便所さでも行きたくなつたんだか、猫さ結^ゆつけて行つたんだけど。いや猫の引張つこと、引張つこと、いや引張るにも引張るにも、髻は、

「なえはえさよ、なえはえさよ、さよのカイ首もげそうだ」
て言うたど。

（大石きみよ）

85 南の山の馬鹿聲・馬の尻に札

南の山のおんつあ嫁もらつて、嫁の家さ泊りに行つたれば、その家の床の間あつて、そこさ穴あいつだから、

「こさ、ええ掛図でも掛けつどはあ、これあ大変にええ床の間になるて言え」

て、嫁に教えらつて、こんどそこさ泊りに行つたど。そしたらば、家ずつと見せてもらつたらば、床の間に節穴あるもんだから、

「いやいや、これは何か掛もののええなでも掛けつどはあ、さっぱり見えねし、ええ床の間になるなあ」

て言うたら、その家のじさまは、「いやいや、これは馬鹿だなて聞いっただげんども、大した馬鹿なでない、大したええ聲だでこ」

て喜んで、そこら家歩^{ある}つて、廊下さ行つたれば、こんど馬の尻尾ぶつたでつたけあ、「おじいさん、おじいさん、この馬の尻さ穴あいつだから、こさも、その掛けものかけつどええ」

て、そうして嫁とつかえさつじやけど。

(大石きみよ)

86 南の山の馬鹿聲・馬の尻に札

三つ目に、嫁の実家さ行つたけど。

「見ておくやい、こっち普請したとこだ。こげな床の間拵えたどこだから、見ておくやい」

て言わつて、そして行つてずっと見て立派な柱だけと言うげんども、ちよつと節穴あつたけど。こんど、

「節穴ここにあつたのよ、まず。ほれ、気あ付かねがつたのよ」

て言うたば、

「いやいや、こげなものの差支えない。柱かくしていうものあるもんだから、柱か

くし掛けつど、さっぱり見えねから、差支えないから」

で言うごんだど。そう言うもんだで言わつて行つてなあ。そしてはあ。

「馬鹿で言うこと聞いただけあ、馬鹿でなどないもんだなあ」

で言うもんでよ。父ちゃんは喜んで、

「おらえに、こういう馬飼つてあんのよ、馬を戸の口さ行つて、おらえの馬見て呉ろ」

馬見て、

「ええなあ、ええ馬だな、ほだなあ」

で、尻尾など引立てて見てるうちになあ、尻の穴あつたじも。

「ここにも節穴あつこんだ。柱かくし掛ければ差支えないから」
で言うたど。

「いやいや、こりや、やつぱりなあ」

で、親父さま、そこであきらめて仕方ないと思つて、

「こげな男に娘呉つても仕様ないから、取つかえすほかあんまえ」

と思つて、そしてはあ、取つかえしたど。

(佃
すゑ)

87 南の山の馬鹿髻・数の子

むかしあつたけど。

南の山の馬鹿髻あ、嫁もらつて、嫁の家さ三つ目でいうな、招ばつて行つたど。

御馳走に数の子豆あ出た。いや、その数の子のうまいこと、うまいこと、

「いまと食^くだいもんだ」

て、寝てから嫁に、「数の子、よつぽどうまいもんだ、いまと食^くだいげんどもな」て言うたら、嫁、

「あの、流しの方にあつから、カメさ入ったから食^くえ」

て言わつて、そして行つて食つた。いやうまくてうまくて一生懸命食つてゐるう

ちにはあ、頭突込んで食ったれば、カメ頭さ喰付いて取んなぐなった。そしてずうっとカメかぶりで、ずっと手さぐりで歩くうちにはあ、その、便所さ落ちでつたど。そしてこんど、そこさ誰か便所さ来た音すつど思つたば、石で尻のごつてポーンと投げつじど、カメ割つではあ、出はつて来て、そして身成^{なり}洗つて、そして御馳走、祝いことでもあつたべな。祝いこと始まつど、こんどは謡い出て、「みぎわのツルカメは…」なて言うたれば、自分がカメのこと言わつじやがなと思つて、

「石で尻のごつた、石で尻のごつた」
て、馬鹿聲は言うたけど。

(大石きみよ)

88 南の山の馬鹿だんぼ

娘に南の山から髻もらつたど。そして里帰りに、髻と来たわけだ。来つどき、ドッコイシヨ、ドッコイシヨて来たもんだど。そしていよいよ家まできて、娘のダダが、髻が来たもんだから、御馳走^{ごしや}拵えらんねて、団子出したれば、そいつ大変うまかつたて。んだから忘れねで、そいつ食いたいげんど、何て言うのだから忘せて語らんねから、ドッコイシヨ、ドッコイシヨて行つたもんだから、そればかり憶えてて、団子忘れてしまつたど。んだもんだから、「あれよ、あれよ」て言うげんど分んね。ドッコイシヨて何のことだかさっぱり分んね。そしたれば、

「ドッコイシヨざあ、あれよ」

て、鍵引つぱつて、ダダ、ちようど鍵の向いさ来つたどき、引つぱつてだの、「あれよ」て放すど、スナズキ（ひたい）さぶつつかつたずも。そうすつど、大変に団子みたいなコブできたずも。

「団子のようなコブできた」

「ああ、それよ、団子よ」

て言うたど。

(男鹿 秀)

89 南の山の馬鹿髻・団子髻

南の山のおんつあ嫁とつて、そして嫁の家元さ行つたれば、団子のうまいな御馳走しておぐやつたけど。そしてその団子がうまくてうまくて、

「なえだて、おれも行つて拵つてもらつて食だいもんだな」

なて、その、「何ていう名前なもんだ」て聞いたら、「団子て言うのだ」

「ほんじゃ、おれも行つて、おっかに拵つてもらつて食うべ」

て、忘せつど悪いから、ダンゴダンゴ、ダンゴダンゴて来たど。そして大きな川あるもんだから、「ドッコイ」て、のっ越えたらば、ダンゴ忘せではあ、ドッコ

イドッコイ、ドッコイで来たど。そして、「今来た」「何御馳走あつけ」て言うたら、「ドッコイなて言うことは聞いたことないな」「んだて、ドッコイざあよつぽどうまいもんだけがら、拵つて呉んないが」

「おら、ドッコイなて言うもの知しやねな」

「んだて、ドッコイていうもんだけから、拵つて呉ろ」

て、カギさ手ぐつて、グルグル、グルグルと廻っているうちに、カギはパイ
ンとおっかの額さぶつつがつて、

「いや、痛いこと痛いこと、まず団子のようなコブあ出来了」

「その団子のごんだ」て言うたけど。

(大石きみよ)

90 南の山の馬鹿聲・団子聲

孫さんでもあつたべ、泊りに行つたば、大したうまいがつたど。そして団子、家さ帰つて拵つてもらつて食うべと思つて帰つてきたら忘せつからてな、「ダンゴ、ダンゴ」て語り語り来たら、堀あつたごんだど。それ、「どっこいしょ」と、のり越えたわけだ。そうすつど、「どっこいしょ、どっこいしょ」て言うてきて、かあちゃんどこさ来て、「かあちゃん、里さ行つたら、うまいもの拵つてもらつて食つてきた」「なじよなもんだ」て言うたらば、「どっこいしょ拵つてもらつて食つたから、拵つて呉ろ」

て。かあちゃんが分んねがつたど。「何なもんだ、どっこいしょつて」。そして、「粉をまるめて、そしてゆでて、黄粉さ転ばして、御馳走なつてきた」「そんな、ダンゴだごで」て、かあちゃんに言わつたど。

(男鹿てつの)

91 南の山の馬鹿聾

むかしあつたけど。

南の山なて、なんぼか開けねどころであつたべな。あるところに、南の山から聾もらつた。始めて舅札に行つたときに、嫁と二人でお里歸りに行つたとき、不調法なこと語らんねから、

「おれ、陰にいて、親が向うで話すとき、肝要なこと話すとき、不調法なことではなく、向うで話したとき『さようでござり申す』て言え」
て言わつで行つたぞこだ。嫁と二人で…。

あれこれて、お話申上げるわけだ。そんとき、肝要な話出たとき、「さようでござり申す」て言えと言わつで行つた。ただそのしるしに、チンポコの先に糸縄つけて、肝要な話したとき引張つから「さようでござり申す」て言え、それから節穴などあつたときは、こういうどこさは、「火伏札」でも貼つじど、大そう結構なもんだなて賞めつじどええなんて教えらつた。節穴さ火伏札は大変ええがつたど

も、馬の尻の穴あるもんだから、馬の尻にも、

「ここさも、火伏せ札貼っじどええ」

て言うたど。

(後藤とよ)

92 屁たれ嫁

あるところだな、嫁もらって、姉、姉て言うたもんだどな。そしたれば大した青くなつて、どこか悪くて青くなつたもんだから、

「なえだ、姉、姉、どこか悪れか」

て言うたれば、

「おれ、どこも悪れないげんど、屁たまっじど、こういうなんなだ」

て、言うて、そして、

「んじやらば、屁などたってみろ」

て言うもんだから、

「ほんじゃ、アテギブチ押えておくやいな」

て、ぐらつと尻、したぐつて、たっだれば、じじとばばは、お恵比須棚さ吹っ飛ばさつだど。そしてはあ、そんな屁たれ女、置かんねて言わつて、出さつて、ずつと行つたれば、子どもら、梨もぎしつたけつて…。

「そんなの、おれ、屁でもいで呉れんべ」
て言うて、

「屁でもがれるもんで、あんまえちやえ」

「ようし、おれ、もいでくれる」

て、ぐらつと尻ひつたぐつで、ブウーてたっだれば、梨あバラバラ、バラバラで落ちで来たごんだけな。そして、梨をもいで、そんな時、飯豊山さ登る導者大勢来たもんだから、

「あんなの、おれあ屁で吹っ飛ばしてみせつから…」

どかて、屁たっじやれば、ドドドド、ドドドドときつでじゃっけあ、スウーと引くと、ドドドド、ドドと、こっちや来たけど。そしてそいつ見でて、大した金持ちの家の人あ、倉の番に頼むかなあて、倉の番さ頼まつじやけど。そうしてこんどは倉さ寝で、

「誰じゃ、誰じゃ」

て、いつでも屁たつでいで、泥棒よけになつたけど。泥棒が入つて来つかと思うと、「誰じゃ、誰じゃ」て屁たつでいたつけど。とーびつたり。

(大石きみよ)

93 長い名の子

子ども遊んで、深い井戸だからな、ツルベというもんで、ダンコン、ダンコンして汲んだもんだ。そいつ井戸さ落ちたげんど、上げらんねくて、隣の家さ、

梯子借りに行ったど。そうすつど隣のおじいさんがキンカであつたど。そして何だて聞いたば、

「キネセ、キネセ、ヤナギノセ、イツチヨギツチヨ、ニギツチヨ、チヨギノベツトスツトツト、チヨヤレカイボ、タナツリズブグリマタジロウ、井戸さ入ったから梯子貸してもらいたい」

て言うげんども、おじいさんが聞きつけね。何べんも言うてるうちに、井戸さ落ちた子ども死んだど。とーぴったり。

(男鹿てつの)

94 短かい話

ちっちゃいヨーガが栃を^{まなぐ}目さ入^いつで、そして飛んできたど。そうすつど、肥出^{こい}しカギで、じじあ、取つて呉つじやれば、ヨーガが、

「カンブン（過分）だ、カンブンだ、カーン」
て飛んで行ったど。

（後藤とよ）

95 果てなし話（1）

川端さ、枥の木あった。そしてこんど、川さポタンと落ちてはクリクリつと廻つては流れ、またポタンと落ちてはクリクリつと廻つては流れ、毎日、ポタンと落ちてはクリクリつて廻つては流れ…。

（大石きみよ）

95 果てなし話（2）

むかしあつたけど。ここのようなどこに、川さ梭橋あかつてあつたけど。そしてその橋のたもとさ行つて、蛇あ頭出したど。そして見つだれば、ノロノロ、ノロノロと出はつてきたつてよ。ノロノロ、ノロノロ、今日もノロノロ、明日もノロノロ、とーびったり釜のふた。

（鈴木ひろ）

（ノロノロ話の話者は、他に、大石きみよ、男鹿せん、男鹿てつの、後藤とよ、佃すゑがあるが、全く同系なので略す）

96 大杉の秘密

ここの天井の高いところに、むかしヒノウサマというて大きな杉があつたそうだ。そいつああんまり大きくて、酒田の海、日かげになつて、そして酒田から魚、日かげになつて獲れないと、たと寄らねくて、木切り来て、切つてみたげんども、昼間切つて、木っ端をここに投げて置くもんだからな、そうすつどその木っ端、夜、みな細かな木衆あ、見舞いにきて、みな喰付けて行くごんだずも。そして元の形になつて、大きくなつて……。そしたれば、ミソハギの木は、仲間なかばさ入つてもらいたいて見舞いに木っ端喰付けに來たわけだ。そしたら、

「お前は木でない、草の方の味方だから、木の方さ、はめらんね」

て言わつたど。そうすつど怒つて、切つていやつた人さ教えたごんだべな。「お前は木でないから」て、はぎらつで來たから。「あの木はなんぼ切つたて、木の王様だから、みな木の衆あ、お見舞いに行くじど、夜のうちに喰付けて來つから、なんぼ切つたて、もつかえすわけに行かない」。それから、「その木っ端を焚い

た方ええ、そいつ一日切った木っ端を燃やす。そしたらこんどは、もつかえされっから……」

そしてやっぱり火焚いて、みな昼間焼いた。そしたらもつかえった。とーびん
びったり。

(男鹿てつの)

97 てんぽ物語

天保元年ヤカンの年 近江のびわ湖さ火あついて

めっこが見つけ きんかがききつけ

足なしがかけつけ 手なしがもみ消した

(大石きみよ)

98 てんぽ話

闇の夜に 鳴かぬ鳥の声聞けば 生まれぬ先の父ぞ恋しき

(大石きみよ)

99 渡 辺 綱

一に頼光、二に渡辺、三に貞光、四に宝生なて、六人の山伏になつて、大江山さ鬼退治に行つたど。そんとき、鬼のかいな持つてきて、そしてしまつて置いたど。そしたら鬼はおば御に化けて来て、「鬼の腕とつてきたて言うから、見せてもらいたい」て来たずも、そして出して見せたれば、「珍らしいもんだ」て見て行つたど。そして「ついだものか」て自分の腕さ継いだつて。そして、「これこそ、おれの腕だ」て、上破風から飛んで行つたど。んだから上破風はあげんななて言う

て、年寄衆から聞いてきたな。渡辺という家では上破風はあげねな。

(男鹿てつの)

100 弘法大師

弘法大師ざあ、悪い人いまして、ええ人さ忠義する人だったど。ここ米沢に弘法大師さま、中田では芋を石にしたり、塩野ではみな、水、塩水にして行つた。

下女あ、お正月に餅拵うな、旦那に、弘法大師に呉れろ言うたときに、下女は下女だから、たと貫わんねがったがして、半分とって半分弘法大師さあずけたわけだ。そうすつど弘法大師は歌詠んだど。十五日たつたど。

弘法もいかなる旅もしてみたが

十五夜の月はがね月これも初なり

て詠んだごんだど。そうすつど下女も賢いもんであつたべ。

雪にかくれてここに半分

て、自分しまったげんど、歌詠まっで出したど。

(男鹿てつの)

中津川のわらべ唄

1 うらのじさの木さ

うらのうらの　じさの木さ

雀が三羽止まった

一羽の雀のいうようは

むしろ三枚　ござ三枚

六枚屏風を立てまわし

ゆんべござった花嫁ご

ホロリホロリと泣かしやんす

何かくやしくて泣かしやんす

何もくやしくなけれども

おらが弟の仙松は

七つ八つから金掘りに

金が出たやら出ないやら

金山くずれて死んだやら

一年もよつてもまだ来ない

二年もよつてもまだ来ない

三年三月で状が来た

なじよな状だか読んでみろ

おせんに来いとどの状だもの

おせんはまだまだやられない

衣裳の一つも着せてから

帯の一つもさせてから

前のお寺さ参らせて

うしろのお寺さ参らせて

おせんの袂さ血がついた

血でないもの 血だ血だと

ゆんべ化粧した

紅だもの紅だもの

(井上元一)

2 一にたちばな

一にたちばな二にかきつばたね

三に下り藤四に獅子牡丹ね

五ついやまの千本桜ね

六つ紫いろよく染まるね

七つなるせの八つ山吹はね

九つ小梅がちらちら落ちるね

十に殿様葵の御紋ね

丸山土手から東を見ればね

門の扉におとわさと書いたかね

おとわさしたかべっこうの櫛をね

誰にもろたか

源次郎さんにもろたかね

源次郎男は伊達者になったかね

伊達者みこんで

髪の毛がもつちやもちや

(井上元一)

3 びつきどの

びつきどのびつきどのいつ死んだ
ゆんべ酒飲んで、今朝死んだ
お医者さま来たから戸を開けろ
ガラドンガラドン　こんには
お前にあげるもの何にもない
油揚げ一枚　こんにやく一枚

ジャンケン　ポン

(井上元二)

4 ゴマ蒔きにまかる

ゴマ蒔きにまかる
何石何石蒔いてきた
千石千石蒔いてきた
千石屋の女郎は
神の前ではらんだ
仏の前でつん産^なした
名はなんとつけまんしよ
八幡太郎とつけまんしよ
八幡太郎のおんまやさ
馬なんぼたてこんだ
四十八頭たてこんだ
草なんぼ刈りこんだ

四十八背負い刈りごんだ

水なんぼくれごんだ

四十八桶くれごんだ

いっちのなかのよい馬さ

油めいてとろめいて

栗毛のはなをよりかけて

今日どこまでまかるべ

ああまあそとで日が暮れて

あかつき起きて空見れば

うつくしい稚児が

金の盃さしかけて

こがねのちようしを手にもつて

ぐるぐるへいしに酒ついだ

(井上元二)

5 おらあたりの雀は

おらあたりの雀は

きんじよろしい雀で

柳の上に家造り 柳の下に田造り

一束三把 ガリガリ

二束三把 ガリガリ

三束三把で刈り止めて

牛につけ馬につけ

われあ一把ひちちよつて

地藏堂の前さ ソロリソロリ通うたれば

犬あガツとほえて来た

跡ちよいと見たれば

着物の小袖拾った

洗い場で洗って　しぼり場でしぼって
うしろに干せば鳥つつくし

前に干せば人見るし

火棚に干せばすすけるし

馬やに干せば馬くさい

隣の油火でやつと干してもらった

次郎坊に着せれば太郎坊がうらむ

太郎坊に着せれば次郎坊がうらむ

ゆうべ生れた赤子に

やつと着せ申した　着せ申した

浅い田にザボリ　深い田にザボリ

ざあこざあ虫えびはねて　ここんだ

(鈴木千歳)

6 おらえのおぼこは

おらえのおぼこはよいおぼこ

木綿の合羽に茶の小袖

野さも山さも寝てみたが

松葉にさされて目が覚めた

ここはどこだと思たれば

鎌倉街道の門の下

門から続いて信濃町

信濃土産に何もろた

一に香箱　二に手箱

三にさらさのカタビラを

誰に呉りよとてもろて来た

おせんに呉りよとてもろて来た

おせんはいないもの死んだもの

今日は七日の墓まいり

墓のぐるりさ石積んで

石のぐるりさ花植えて

花のぐるりさ香立てて

香のぐるりさゴマまいて

五万仏と拝まんせ 拝まんせ

(井上元一)

7 むかえの山で

むかえの山で萱刈るは

善太郎どのか 太郎どのか

かえりによつてお茶まいれ

お茶のこは 何なに

天下一の香箱

香箱のなかに赤い小袖がみつみつ

白い小袖がみつみつ

三つになるワカは

どつから降りる 井戸から降りる

江戸一番の長者の娘

(大石きみよ)

8 むかえ通るは

むかえ通るは熊野のお導者か

肩にかけた カタビラ

片裾は梅の折り枝中はこのその橋

そりはしを渡る人として足袋脚絆に

こぎりこの小包 誰にもろた小包

みさか街道の庄屋が娘にもろた小包

みさか街道の庄屋の娘は日本手ききと

聞えた

一つでは お乳飲みそめ

二つでは 御飯食いそめ

三つでは おじよじよ履きそめ

四つでは 綾のとりそめ

五つでは お針持ちそめ

六つでは 糸のとりそめ

七つでは 機の織りそめ

八つでは 金欄たたんで

九つで 庄屋に売られて

十で 大阪へ登った

大阪ところはつらいところで

小麦七白大麦七白お手に豆が九つ

ここの一の豆にたまげて

ふるさと恋し こいしながら

お寺の前さ踊りが立った

どっから立った江戸から立った

江戸一番のたてしの娘

踊りの中で たとがみ拾ろた

何だと思って開いてみたら

(井上元二)

糸とり習え 機織り習え

小袖の小褄を縫い習え

(井上元二)

9 おつしつし

10 さつさこばたけの

おつしつし かわらの孫太郎虫あ

いっぴき いくら

たんとうばんとうさんに聞いたれば

それまたやすいごんだ

おめぐみなされし

オツキラキのキツキ

さつさこばたけのさのすけおかた

おぼこ産すどてカブなした

親父に見せねで煮て食った

(大石きみよ)

11 つつとめつらの皮

つつとめつらの皮

猫 三味の皮

男 そっぱ 齒そっぱ

腰巻 もんぱ

ぶんどづら

虎はあわせた

なむさんぼう

ようさんぼう

つつとめた つれん

(山口みつ)

12 とんび

とんびとんび きつとんび

あしたの空 よくしろ

(大石きみよ)

13 道の傍はたの地藏坊

道の傍の地藏坊 からすに頭蹴らつだ

からすこそ地藏だ

からすなど地藏だらなして猫に

とられべ 猫こそ地藏だ

猫など地藏だらなして犬に

14 か ら す

とられべ 犬こそ地藏だ
犬など地藏だらなして狼に

とられべ 狼こそ地藏だ

狼など地藏だらなして野火に

まかれべ 野火こそ地藏だ

野火など地藏だらなして水に

消されんべ 水こそ地藏だ

水など地藏だらなして人に

飲まれべ 人こそ地藏だ

人など地藏だらなして地藏拝むべ

地藏こそ地藏だ 地藏だ

(大石きみよ)

からすからす どっちや行つた

糍とりに まかつた

うんだらその糍は酒に造り申した

うんだらその酒は犬がなめ申した

うんだらその犬は皮にはぎ申した

うんだらその皮は太鼓にはり申した

うんだらその太鼓は打って破き申した

うんだらそのかけは灰に焚き申した

うんだらその灰は胡瓜畑にまき申した

うんだらその胡瓜は烏ちぎり申した

うんだらその烏は矢にはぎ申した

うんだらその矢は向いの笹やらに

打って止め申した

(鈴木千歳)

16 おらえの子守こは

15 おらんにおせんに

おらえの子守こは どき行つたべ
あら町に横丁さ ぼち買いに
えまえに来るから 寝て待ちろ

オーワイ オーワイ

おらんにおせんに大根好きで
大根かじかじ 塩なめた

ねねじどネズミにひかれるし
起きるとおたかにさらわれる

おらしよっぱいなこらしよっぱいな

オーワイ オーワイ

おらんにおせんにいも好きで

(高橋うん)

いもかじかじ屁たっじや

おら甘いな こら甘いな

(鈴木ひろ)

17 ねんねんねる子は

ねんねんねる子は日本人

ねね子は弱虫 ロシアの子だ

ねねじどオタカにさらわれる

ねねじどオタカにさらわれる

オワイヤーレ オワイヤーレ

(鈴木ひろ)

雨ふり花は夜はつぼんで夜中に開き

今朝の夜明けにみなひらいた

のっこえとつてこえ 前でまえで

赤子がなくや うてやたたけや

はえ ころばせや

それできかざら

乳のませ 乳のませ

(井上元一)

18 たんたん竹の節

たんたん竹の節 四方れんげの花ひらき

のっこえとつてこえ 前のまえの

19 お人形

お人形わたす どなたにわたす
○○さんにわたす 落せば恥よ
錦をしめて

おだいしこの こだいしこ

(井上元二)

あ　と　が　き

飯豊山麓の山間を流れる白川沿いの、ここ中津川は白川ダム建設で水没が決定し、今春にも小坂・数馬・須郷の百余戸は移転する。水没地区の緊急民俗調査を実施して下さった山形県教育委員会社会教育課の企画は、消え去ろうとする古きものに新しい光を当てるということにとどまらず、移転し、新しい生活に入る人々へ一つの勇気を与えることになるのではなからうか。だとすれば、その調査の一員に加えていただいた私にとって大きな責任をどうしようかと戸惑いを感じる。せめて、豊かな昔話の素材を、その分野の方々に分かつて、すぐれた中津川の温存して来たものを提供することによって、責任の一端を果したいと考えた次第である。

夏の日ざしの中を歩き廻った昨夏のことを思い出す。ダム予定地のひろびろとした須郷・数馬を一望にする地に立つ、また飯豊山の登り口、岩倉部落の朝霧の中での調査員の姿を思い出す。そして調査員の私たちを温かく迎えて下さった土

地の人々のことを思い出す。つたないこの昔話集が、お世話になった方々と、日本全体の、この地区に関心を持つ人々の心を結ぶよすがになって呉れれば幸々と思っている。

岩倉の後藤とよさんの、多分孫さんが、私に当てて下さった葉書は、単に私に当てられた私信というより、山国の便りとして、この本を読んで下さる方々への挨拶と思い、あえてここに記したく思います。

寒さもきびしい冬になりました。おかげさまでおばあちゃんも元気で花笠作りの手伝いをしています。昔話の本とどきました。ほんとうにありがとうございました。私も楽しく拝見いたしました。中津川のおばあちゃんたちの昔話を読んで、笑ったり、ことば使いがおかしいので、家族みんなで楽しみました。また来年も元気でおいでくださるのをお待ちしております。

す。(後略) — 後藤和枝 —

なお「わらべ唄」は井上元一氏の採集されたものの中から選んで資料として入れました。感謝します。

この昔話集（下）の出版について、改めて県教育委員会及び戸川・江田・清野・奥村・後藤の各先生方、飯豊町中津川支所の方々に、話者に対すると同様、深謝いたします。

昭和四十六年一月二十日

飯豊山麓 中津川昔話集
(下)

昭和四十六年一月二十五日 発行

編者 武田 正

南陽市三間通二三二の三

山形短期大学民話研究センター資料叢書

飯豊山麓 中津川昔話集
(下)

*本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成二十一年七月三十一日

山形短期大学民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

山形短期大学附属図書館内

(電話)〇二三―六八八―七五四四

山形短期大学民話研究センター資料叢書 既刊（再刊順）

- 『西川町の昔話』（一九七五年九月発行、二〇〇六年三月再刊）
『むかしあったけど』（一九七五年二月発行、二〇〇六年三月再刊）
『米沢市築沢の昔話』（一九七二年十一月発行、二〇〇六年三月再刊）
『米沢市塩井の昔話』（一九七三年十一月発行、二〇〇六年三月再刊）
『安楽城の伝承（一）』（一九八四年四月発行、二〇〇六年三月再刊）
『安楽城の伝承（二）』（一九八五年四月発行、二〇〇六年六月再刊）
『安楽城の伝承（三）』（一九八五年十月発行、二〇〇六年六月再刊）
『高畠町和田の昔話』（一九七九年八月発行、二〇〇六年七月再刊）
『及位の昔話（一）』（一九八〇年八月発行、二〇〇六年七月再刊）
『及位の昔話（四）』（一九八〇年十二月発行、二〇〇六年十月再刊）
『及位の昔話（五）』（一九八一年二月発行、二〇〇六年十月再刊）
『佐兵ばなし』（一九七一年一月発行、二〇〇七年四月再刊）
『まま子いじめ 米沢市六郷・宮井の昔話（一）』（一九七四年四月発行、二〇〇七年四月再刊）
『かっぱの硯 長井市・米沢市六郷の昔話』（一九七四年七月発行、二〇〇七年四月再刊）
『行けざんざん 小国町昔話集』（一九七六年九月発行、二〇〇七年四月再刊）
『お婆の手ん箱（一） 阿部キヌオさんの語り』（一九七七年四月発行、二〇〇七年七月再刊）
『及位の昔話（二）』（一九八〇年九月発行、二〇〇七年七月再刊）
『及位の昔話（三）』（一九八〇年十月発行、二〇〇七年七月再刊）

- 『牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第一集』(一九六八年三月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『続牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第二集』(一九六八年十月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『続々牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第三集』(一九六九年一月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『牛方と山姥(四) 海老名ちやう昔話 第四集』(一九六九年四月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『飯豊町昔話集―大平・新沼・高畑―』(一九七一年九月発行、二〇〇八年四月再刊)
- 『蛇むこむかし しらたかの民話』(一九六六年二月発行、二〇〇八年四月再刊)
- 『お杉お玉 小国町昔話集(一)』(一九七〇年二月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『さとりのお化け 小国町昔話集(二)』(一九七〇年八月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『鬼と豆のくいくら 小国町昔話集(三)』(一九七〇年十月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『田の中の田三郎 近きよ姫昔話』(一九六九年八月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『お糸唐糸 故安部忠内翁／安部はつよ姫 米沢の昔話集』
(一九六九年九月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『つゆふじの伝説 安部忠内・稿』(一九六九年十一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『さるむこ 田沢の伝説と昔話』(一九七六年一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『ちようじやのむこ』(一九七六年一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『飯豊山麓 中津川昔話集(上)』(一九七〇年十二月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『飯豊山麓 中津川昔話集(下)』(一九七一年一月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『木小屋の生活 民話序説』(一九七二年四月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『カマイタチ 東根昔話集2・置賜昔話補遺』(一九七二年五月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『川崎みさをさんの昔話』(一九七九年一月発行、二〇〇九年七月再刊)